

日本質的心理学会 第17回大会

Japanese Association of Qualitative Psychology

大会テーマ

「はなれるゝ社会的距離による親密性」

日本質的心理学会 第17回大会

2020年
10/24
土曜日

2020年
10/25
日曜日

日時 | 2020年10月24日(土)・25日(日)

場所 | オンライン開催

大会ウェブサイト | <http://www.mivurix.sakura.ne.jp/jaqp2020/>

プログラム抄録集 2020

表紙写真提供：金沢市

日本質的心理学会
Japanese Association of Qualitative Psychology

<https://www.jaqp.jp/>

日本質的心理学会第 17 回大会

プログラム抄録集

オンライン

開催のご挨拶

日本質的心理学会第 17 回大会のプログラム抄録集ができあがりましたのでお届けします。大会への参加，研究発表や大会企画への参加のための情報として活用いただければ幸いです。

ご存知のように，今回の大会は当初予定されていた韓国ソウルでの大会が新型コロナウイルスによる状況の変化によって来年に延期となったことに伴い，学会会員が集まりあい，研究発表を行い，情報交換する機会を保証するために，学会理事会が中心になってオンラインで開催することになったものです。

すでに日本心理学会をはじめ多くの学会がオンライン大会を実施していますので，われわれも少しずつ慣れてきたとはいえ，オンライン大会という開催方式の中でどのように集まりあい，情報交換するのか，ということは，当座の課題であるとともに，未来にもつながるひとつの実践活動ということもできます。今大会のテーマを「はなれる～社会的距離の中での親密性」としたのも，オンライン大会を質的心理学のひとつの実践としてとらえる，という趣旨を示したものだといえます。

幸いにも多くの会員の皆様から参加申し込み，研究発表や企画の申し込みをいただき，大会は盛況となることが期待されます。オンラインとはなりますが，大会で皆様とお目にかかれますことを楽しみにしております。

日本質的心理学会第 17 回大会実行委員長

渡邊芳之

目次

1. 大会スケジュール.....	1
2. 大会参加者の方へ（大会参加方法）	5
3. 口頭発表者の方へ（口頭発表方法）	7
4. シンポジウム発表者の方へ（シンポジウム発表方法）	8
5. 大会プログラム・抄録	
(1) 大会企画招待講演.....	9
(2) 大会企画シンポジウム.....	10
(3) 公開シンポジウム.....	11
(4) 講習会	12
(5) 委員会企画・会員企画シンポジウム.....	15
(6) 口頭発表	55

1. 大会スケジュール

10月24日(土)

(会) 会員企画シンポジウム

(委) 委員会企画シンポジウム

	Zoom Room A	Zoom Room B	Zoom Room C	Zoom Room D	Zoom Room E	Zoom Room F	Zoom Room G	Zoom Room H
8:45	準備	準備	準備	準備	準備			
9:00	口頭発表 1A	口頭発表 1B	口頭発表 1C	口頭発表 1D	口頭発表 1E			
10:45	準備	準備	準備	準備				
11:00	口頭発表 2A	口頭発表 2B	口頭発表 2C	口頭発表 2D				
12:45	休憩	休憩	休憩	休憩	出版社トーク ・新刊紹介 ・著者は語る			
13:45	準備	準備	準備	準備				
14:00	口頭発表 3A	口頭発表 3B	口頭発表 3C	口頭発表 3D				
15:45	準備	準備	準備					
16:00	シンポ 1A(会) 「Relational Being」関係からは じまるーガーゲン がひらく新たな知 の地平ー	シンポ 1B(会) ヤーン・ヴァルシ ナーの「AN INVIT ATION TO CULTURAL PSYCHOLOGY」を読 む	シンポ 1C(会) 対話的自己エスノ グラフィにおける 対話者の存在				公開シンポ 質的研究法マッピ ングの世界を語る	
18:00								

懇親会は Spatial chat で行われます。最初は「参加申込み完了者用ページ」にあります懇親会 Zoom の URL にお集まり下さい。

10月25日(日)

(会) 会員企画シンポジウム (委) 委員会企画シンポジウム

	Zoom Room A	Zoom Room B	Zoom Room C	Zoom Room D	Zoom Room E	Zoom Room F	Zoom Room G	Zoom Room H
8:45	準備	準備	準備	準備		準備		
9:00	講演会 The Role and Function of Narrative Research in Qualitative Inquiry	シンポ 2B(委) ポスト質的心理学 とこれからのアク ションリサーチー 世界的危機の恒常 化時代を迎えてー	シンポ 2C(会) 再考、当事者と倫 理と研究者ー医療 分野における質的 研究の貢献	シンポ 2D(会) 「土地の力」とレ ジリエンスー人々 はコロナ禍をどう 生き抜こうとして いるのかー		講習会 1 作業感を減らして 楽しくオープン・ コーディングをし てみよう		
11:00	準備	準備	準備	準備	準備			
11:15	シンポ 3A(会) 「リアル」と「ヴ ァーチャル」の境 界を超えて:「直接 経験」と「間接経 験」の議論の先へ	シンポ 3B(会) 実践と研究のあい だでーその関係性 や葛藤、わたした ちはそこで何を見 つけるのかー	シンポ 3C(委) 背中合わせで世界 に臨むー環境、文 化を問うことと質 的心理学の今とこ れからー	シンポ 3D(会) ナラティブを通し た意味生成におけ る多声的空間の場 とその意義	シンポ 3E(会) 現象学的人間科学 への招待ーIHSRC 2022 に向けてー			
13:15	休憩	休憩	休憩	休憩				
14:00								
14:15	準備	準備	準備	準備			準備	
16:15	シンポ 4A(委) ポスト 2020 教育 のゆくえ-新しいバ ラダイムへのシフ トのもとでそだち をささえるー	シンポ 4B(会) 言説分析と社会的 課題ー三人三様よ み比べ(2)ーコ ロナ禍における言 説分析の可能性を 求めてー	シンポ 4C(会) Auto-TEM を通した 他者との出会い	シンポ 4D(会) 日常/非常時にお ける家族、対人サ ービス専門職、行 政、社会、国家と の関係性を問い直 す			大会シンポ なぜいま質的研究 の日韓交流が求め られるのか ーソウル大会に向 けた展望と期待ー	
16:30	準備	準備	準備	準備	準備	準備		準備
18:30	シンポ 5A(委) 技能を見つめて	シンポ 5B(会) 知識偏重社会への 警鐘ー「知らな い」のパフォーマ ンスが未来を創る	シンポ 5C(会) イメージション 理論がひろげる 「発生の三層モデ ル」の可能性	シンポ 5D(会) 静と動のビジュア ル・ナラティブ	講習会 2 解釈学的現象学の 基本と具体的な方 法を学ぶ	講習会 3 複線経路等至性モ デリング(TEM)を 学ぶー過程と発生を とらえる TEA の技 法	講習会 4 KJ 法をいかした質 的分析	

会員総会
10月20日発行の学会
のメルマガ内で、総会
が行われる Zoom の
URL や総会資料が配布
される URL をお知らせ
する予定です。

口頭発表スケジュール (第1著者のみ：タイトルは副題を省略しているものがあります)

口頭発表 1A 10/24 9:00-10:45 Zoom Room A (大会発表賞候補セッション：座長 尾見康博)

- 佐藤奈月 高校生女子がインターネット上で知り合った他者と親密になるプロセス
土元哲平 オートエスノグラフィーの方法論と文化心理学
宮前良平 自粛生活中的の集合的オートエスノグラフィの試み
萩原ちはる 大学生が主体的に学習しないのはなぜか—ナラティブから解き明かす講義に対する意識

口頭発表 1B 10/24 9:00-10:45 Zoom Room B (座長 横山草介)

- 横山草介 ヴィジュアル・ナラティブを用いたフォークペダゴジーの探究
横溝環 サードプレイスとしての地域日本語教室のこれから
佐野香織 学習者の評価意識と学び —「よいレポート」をめざすプロセス—
竹田琢 学習体験の振り返り活動における相互行為分析

口頭発表 1C 10/24 9:00-10:45 Zoom Room C (座長 矢守克也)

- 矢守克也 「媒介の専門家」を媒介にしてアクションリサーチについて考える
松藤遥香 横浜市都筑リビングラボのデザイン
松原悠 災害発生後の社会の「空気感」の変化予測に関する調査についての考察
三品拓人 家族の形成過程と将来展望 —女性の語りから浮かび上がる妊娠の計画性／偶発性
有島みなみ トランスジェンダー当事者における「コミュニティ」の意味

口頭発表 1D 10/24 9:00-10:45 Zoom Room D (座長 勝谷紀子)

- 勝谷紀子 「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程
小沼豊 複線経路・等至性アプローチ(TEA)を用いた教師のバーンアウトに関する質的研究
筑波義信 複線経路等至性アプローチ(TEA)を用いた日本人大学生の宗教意識発達プロセスに関する研究
河本尋子 災害から生活復興に向かうプロセスの多様性
若子静保 対話的な自己エスノグラフィにおける「気づき」

口頭発表 1E 10/24 9:00-10:45 Zoom Room E (座長 竹下浩)

- 竹下浩 事務系職種における視覚障害者の就労スキル発達過程：全盲／弱視モデル
濤岡優 子育てを介さない中で経験された母親としてのライフヒストリー
鴨澤小織 困難を抱える女性に対応したメンタルヘルス支援～社会モデルの視点から～
北村篤司 当事者研究の枠組みを用いた夫婦間の対話促進の試み
本間美穂 障害のある障害者就労支援員の語りから生成される〈知恵〉

口頭発表 2A 10/24 11:00-12:45 Zoom Room A (大会発表賞候補セッション：座長 尾見康博)

- 江刺香奈 負の世代間伝達を断ち切った者のアイデンティティの変容過程
芝崎文子 成人 ADHD 者におけるレジリエンスのプロセス
上西智子 オンライン PAC 分析による北米アカデミック・インターシップ経験学生の就職内定までのキャリア発達の研究
太齋慧 成人期ゲイ男性におけるゲイアイデンティティの変容過程

口頭発表 2B 10/24 11:00-12:45 Zoom Room B (座長 中村雅子)

- 中村雅子 人工物との出会いによる活動の変容の語り：越境としてのクラウドファンディング
神崎真実 複数の場を通して形づくられる自己のありようを捉える
中野祥子 混住寮における対人関係形成に関する縦断的研究—留学生居住者の事例—

町田奈緒士 実感や身体感覚に迫る「質感」的心理学(qualia-tative psychology)についての構想

福山未智 コスプレの魅力とは一歴史的検討とフィールドワークの融合を目指して

口頭発表 2C 10/24 11:00-12:45 Zoom Room C (座長 保坂裕子)

保坂裕子 社会的に困難状況にある子どもたちのニーズと課題

高見仁志 PCK を視座とした音楽科教師の実践知分析

新井素子 自傷行為としての「ニキビ潰し」への主観的意味付け

久保田祐歌 学習のなかの批判的思考 (1)

司城紀代美 教室における「適切性」から考える「特別な支援が必要」な子どものコミュニケーションの様相

口頭発表 2D 10/24 11:00-12:45 Zoom Room D (座長 李勇昕)

李勇昕 新型コロナウイルス禍における台湾の市民社会

園部友里恵 インプロ実践者がパフォーマンス過程において直面するジェンダー・バイアスの問題

直井玲子 男性中心の物語構築を乗り越えるためのインプロ上演形式 The Bechdel Test の理念

李吉雨 親の離婚を経験した青年の家族意識

新原将義 学習のなかの批判的思考 (2) : 18 歳選挙権世代の政治的態度とその学習過程

口頭発表 3A 10/24 14:00-15:45 Zoom Room A (大会発表賞候補セッション: 座長 尾見康博)

齋藤貴子 阿吽の呼吸で実践される清拭—新人とベテラン看護師との比較—

アキノエリザカテロ フィリピン・ラグナ州における有機農業アクター間の情報共有とその影響

杉浦彰子 生涯学習センターで学び続ける意義 —高齢者のライフストーリーに着目して—

大瀧玲子 重度障害児・者をケアすることの意味 (1)

広津侑実子 重度障害児・者をケアすることの意味 (2)

口頭発表 3B 10/24 14:00-15:45 Zoom Room B (座長 小澤伊久美)

小澤伊久美 コロナ禍にある大学教員のライフの転機に関する考察

原恵子 コロナ禍に伴うテレワーク化による職場の雰囲気や関係性の変化

清田顕子 第二言語使用場面での心理的ストレスに対するレジリエンス理論構築に向けての予備的調査

谷ロジョイ ドバイの小規模自助グループにおける継承日本語教育

早崎綾 「見方・考え方」の変容過程と外国語学習 - 地方出身学生の視点から -

口頭発表 3C 10/24 14:00-15:45 Zoom Room C (座長 角南なおみ)

角南なおみ 発達障害傾向を持つ子どもの保護者の視点による教師との関わり

石川千春 自閉スペクトラム症の人は描画体験を繰り返すことでどのように自己理解を深めるか

呉文慧 ASD のある生徒と合意形成する教師の実践的思考

仲本美央 乳児が育つ保育環境を保障する保育者の成長プロセスに関する研究(2)

細野知子 血糖値のセルフモニタリングで生まれるつづやきの現象学的記述 —他者に届けることの意味

口頭発表 3D 10/24 14:00-15:45 Zoom Room D (座長 伴野崇生)

伴野崇生 新型コロナウイルスの拡散とリスクに関する調査 (1)

宮下太陽 新型コロナウイルスの拡散とリスクに関する調査 (2)

王瑩 中国から帰化した「日本人」のアイデンティティ

竹村博恵 日韓関係悪化の状況下で構築される在韓日本人女性のナショナル・アイデンティティに関する考察

横山愛 小学校算数授業における聞き手の役割

2. 大会参加者の方へ（大会参加方法）

事前準備

- 本大会では、ほとんどのセッション（研究発表、各種シンポジウム、講習会）がビデオ会議システムの Zoom を用いて行われます。
- ご参加のみなさまは事前に使用環境をご確認ください。環境によってはアプリの最新版のインストールが必要な場合があります。

Zoom <https://zoom.us/test/>

- 大会事務局から大会 3 日前および大会前日夜に「参加申込み完了者用ページ」のパスワードをお送りします。このページにはそれぞれのプログラムに参加するための ZoomURL 等を掲出します。パスワードや「参加申込み完了者用ページ」内の情報を第三者に漏らさないでください。

<http://www.mivurix.sakura.ne.jp/jaqp2020/complete/>

当日の参加手続

- 送られてきたパスワード等を用いて、大会ウェブサイトの「参加申込み完了者用ページ」（<http://www.mivurix.sakura.ne.jp/jaqp2020/complete/>）にアクセスし、参加する企画の ZoomURL のリンクをクリックして、ご参加ください。
- マイクとカメラが正しく作動するかの事前確認をお願いします。Zoom の画面左下のマイクのマーク右側の矢印マークから、「スピーカー&マイクのテストをする」を選びますと正しく作動するかテストすることができます。また、同じく矢印マークから表示される[オーディオ設定]で最適の音声になるよう適宜調整をお願いします。
- 領収書に参加確認の押印が必要な方は、Zoom 起動時に、事前に申し込んだお名前でログインして下さい。事前に申し込みされた表記と完全に同じ表記でないと参加の確認はできません。領収書に参加確認の押印が不要な方は、できれば[氏名]_[所属]で御参加ください。名称から参加者が推定できない場合、ご連絡し、連絡が取れない場合は退室頂く可能性があります。

例) [氏名]_[所属] サトウタツヤ_立命館大学

- セッション中はマイク[オフ]の状態での聴講をお願いいたします。質疑応答などでご発言の際にはマイクおよびカメラを[オン]にするのをお忘れにならないようご注意ください。その他、セッション中の行動については座長や司会の指示に従ってください。指示に従わない場合には退室していただく場合があります。
- Zoom の操作については、「参加申込み完了者用ページ」内にあります[参加者用操作マニュアル]をご参照ください。

注意事項

- オンラインでの参加・発表においてトラブル等が生じた場合は、日本質的心理学会および大会実行委員会はその責任を負いません。特に、プレゼンテーションにおける著作権、肖像権、個人情報等の取扱いについては十分にご注意ください。
- オンラインでの参加・発表に際し、日本質的心理学会、および大会実行委員会は、コンピュータの操作、インターネット接続、映像・音声等のトラブルについての対応は致しかねます。
- 状況等によっては、オンラインでの発表の中止（座長による中止の判断等も含む）がなされる場合があります。
- オンラインでの参加・発表に要する通信料等は、各自の負担とします。
- 大会の Zoom におけるあらゆる録音・録画は禁止とします。例外については大会公式ウェブ上で告知します。
- 企画によっては企画者によってレコーディングされるものがあります。レコーディング予定の企画につきましては「参加申込み完了者用ページ」に掲出しておりますので、ご確認の上、ご参加ください。

特別公開企画のお知らせ

10 月 25 日（2 日目） 15:00～16:30（延長あり）

ラヂ放談 「オンラインで質的心理学」（尾見康博 with らじおちゃん）

YouTube live で発信予定。詳細は大会公式 Twitter でお知らせします。

3. 口頭発表者の方へ（口頭発表方法）

- 各発表は、発表 12 分、議論 3 分です。セッションの進行上、持ち時間を遵守いただきますよう、ご協力よろしくお願いいたします。
- ご発表の際にお手元のスライドや各種資料を提示される場合は[画面共有]機能をお使い下さい。画面共有を終了させる際は画面上部の「共有の停止」を選択してください。
- セッションが始まる前の準備時間中に、マイクやカメラの動作確認、画面共有やプレゼンテーションの確認をお願いいたします。
- セッション中はマイク[オフ]の状態でお待ちいただき、発表・発言の際にはマイク[オン]、カメラ[オン]に変更してください。
- 総合議論の時間には、セッション会場にて他の参加者の方と議論をしていただいても、発表者が事前に Zoom ホストをご用意いただいてその Zoom の URL を参加者に提示いただき、そちらに参加者を誘導していただいても結構です。事前に座長とご相談ください。
- Zoom の操作については、「参加申込み完了者用ページ」にて公開される「発表者用操作マニュアル」もご参照ください。

口頭発表の座長を担当される方へ

- 座長は、一部を除き、セッションで最初の発表者の方をお願いいたします。
- 学生アルバイトを配置予定ですが操作については答えられない場合があります。
- 各発表は、発表 12 分、議論 3 分です。各セッションの進行については座長の先生にお任せいたしますが、複数セッションで移動して聞く参加者もいますので予定の時間をできるだけ超過することのないようにご協力をお願いいたします。予定通りに進行した場合、全登壇者発表後 30 分程度の総合議論の時間をとっています。この時に、発表者は個別に自身の Zoom の部屋を用意し、「チャット」等に URL を記載して参加者を誘導して個別に議論していただいても構いませんし、口頭発表の場で自由に議論していただいても構いません。事前に発表者と打ち合わせてください。
- 事前準備の時間をとっていますので、この時間に、他の登壇者を促して、画面共有も含め、チェックを行ってください。
- 質疑応答の時間では、Zoom の[手を挙げる]機能、チャット機能もご活用下さい。利用方法（どちらをどのように用いるか等）につきましては、座長の先生にお任せいたします。セッション開始の際に参加者に利用方法のアナウンスをお願いいたします。
- Zoom の操作については、「参加申込み完了者用ページ」にて公開される「司会者用操作マニュアル」をご参照ください。

4. シンポジウム発表者の方へ（シンポジウム発表方法）

- シンポジウムは公開シンポジウム、大会企画シンポジウム、会員企画シンポジウムが行われます。
- 時間は、24日（土）16時から1セッション、25日（日）午前・午後に各セッション2時間の予定です。
- セッション内の進行につきましては、シンポジウムの代表者の責任で進行をお願いいたします。予定の時間を超過することのないようにご協力お願いいたします（次のセッションの準備に影響します）。もし終了時間後も議論を行いたい場合は、登壇者の方で、Zoomの部屋をご用意いただき、そちらに参加者を誘導して下さい。
- 各セッションの前に準備の時間をとっていますので、この時間にプレゼンテーション等ご確認ください。
- Zoomの操作については、「参加申込み完了者用ページ」にて公開される「発表者用操作マニュアル」をご参照ください。

2-4までの記載にあたっては、以下のサイトを参考にいたしました。

- オンライン学会向け Zoom マニュアルの公開
<https://redbuller.hatenablog.com/entry/2020/03/28/022605>
- 学会全国大会のオンラインでの試行開催の運用メモ
<https://cril-shinshu-u.info/archives/1473>

大会企画招待講演 10月25日 9:00—11:00

The Role and Function of Narrative Research in Qualitative Inquiry

(質的探求におけるナラティブ研究の役割と機能)

企画：日本質的心理学会第17回大会実行委員会

講演者：Michael Bamberg (Clark University ; アメリカ心理学会・
質的研究部門次期部門長)

司会：能智正博 (東京大学)

趣旨

Narrative/storytelling has repeatedly been given a privileged standing in qualitative inquiry (and therapeutic efforts). In this presentation, I will briefly go over 'competing methods' and try to answer why and how narrative/storytelling stands out in the field of qualitative inquiry (and therapeutic efforts). With this in mind, I then will interrogate different kinds of narrative methodologies in terms of their effectiveness for the broader field of identity research and therapeutic efforts. In my conclusions I will shift to newly emerging qualitative approaches (e.g., participatory action research, phenomenological, situational analysis) and try to place narrative/storytelling within them.

【訳文】

ナラティブ／物語りは、質的探求（および心理療法の実践）において、これまでも繰り返し非常に重要な地位を与えられてきた。今回の講演では、「競合するいくつかの方法」を概観した上で、質的探求（および心理療法の実践）の現場においてなぜ、そしていかにナラティブ／物語りが重視されるのかという問いに答えることを試みる。その上で、広い意味でのアイデンティティ研究と心理療法実践における有効性という観点から、異なる種類のナラティブの方法論を探索していく。最終的に、注目されつつある新たな質的なアプローチ（例えば、参加型アクション・リサーチ、現象学的、状況的分析）に目を転じ、そのなかにナラティブ／物語りの概念を位置づけてみる。

※本講演は英語で行われます。(資料は日本語訳を併記、日本語での要約解説あり)

※質疑については通訳あり

大会企画シンポジウム 10月25日 14:15-16:15

なぜいま質的研究の日韓交流が求められるのか

ーソウル大会に向けた展望と期待ー

企画：日本質的心理学会第18回大会準備委員会

司会：伊藤哲司（茨城大学）

登壇者：ド・スンイ（成均館大学校）

ハン・ギュソク（全南大学校）

能智正博（東京大学）

通訳者：呉宣兇（共愛学園前橋国際大学）・金智慧（東京大学）

企画趣旨

2020年の第17回大会は、初めて日本を飛び出して韓国ソウルで行われるはずであった。2019年9月に大会準備のコアメンバーがソウルに出向き、先方のパートナーとなる韓国測定評価学会のド・スンイ先生らと会って信頼関係を構築し、その後日本側でも正式にソウル大会の準備委員会が立ち上がった。

しかし、この予想もしていなかった新型コロナウイルスの感染が拡大し、韓国でも日本でも2020年中の収束が見通せない状況となった。韓国側とも協議し、2020年5月に1年程度延期するという判断に至った。画期的な大会にしようと張り切っていたところであり大変残念ではあったが、あくまで「中止」ではなく「延期」である。

周知の通り、現在の日韓関係はけっして良好とは言えない状況にある。政治的・経済的な行き違いに、私たち研究者も無縁でいることはできまい。そのような現状の中で、このシンポジウムでは日韓をオンラインで繋ぎ、私たち質的研究者がどのようにそれを超えて「つなぐ、つどう」（ソウル大会の共通テーマ）ための言葉を紡ぎだしていけるのかを考えたい。そのために、日本側の準備委員会から伊藤哲司と能智正博が、韓国側の準備委員会からド・スンイとハン・ソンギョクが登壇し、日韓それぞれの質的研究の現状を紹介しあい、2021年10月に実現させたいソウル大会での研究交流をどのように意義深いものにしていけるかを議論する。

韓国には、質的研究を中心的に扱うという学会がないと聞いているが、質的な研究への関心は高く、もちろんそれに積極的に取り組んでいる研究者もいる。地理的にも近く、歴史的にも切っても切れない関係にある日韓それぞれの研究者が、言語や文化を超えて質的研究の分野で協働していくことは、そこに新たな地平を開くことにもなるだろう。隣国に研究仲間がいるのも素敵ではないか。なお本シンポジウムは、日本語・韓国語の通訳を介して行い、韓国側から他の参加者も見込んでいる。

公開シンポジウム 10月24日 16:00-18:00

質的研究法マッピングの世界を語る

企画：日本質的心理学会第17回大会実行委員会

司会：春日秀朗（福島県立医科大学）・神崎真実（立命館大学）

話題提供：サトウタツヤ（立命館大学）

安田裕子（立命館大学）

田垣正晋（大阪府立大学）

能智正博（東京大学）

西村ユミ（東京都立大学）

ハッ塚一郎（熊本大学）

企画趣旨

質的研究が盛んになってくると、そして様々な方法が提案されるようになってくると、初学者にとっては、何をどうすればいいのか混乱するような状況も見られる。

「過程-構造」「実存-理念」の二次元で形成された四象限マトリクスを用いて質的研究の代表的な26の研究法を整理（マッピング）した『質的研究法マッピング』（2019；新曜社刊）は、従来にない質的研究法の解説書として多くの人に歓迎された。

この公開講座では、マッピングや質的研究の新しい動向について概説したのち、5人の研究者が本書で紹介された各技法について解説する。

質的研究全体を俯瞰してみたい方、自身の研究に最適な研究法を探している方にとって、必見のシンポジウムとなるであろう。

話題提供

- ① 質的研究法とそのマッピングの意義・・・・・・・・・・（サトウタツヤ）
- ② TEA(複線径路等至性アプローチ)・・・・・・・・・・（安田裕子）
- ③ KJ法・・・・・・・・・・（田垣正晋）
- ④ ナラティブ分析・・・・・・・・・・（能智正博）
- ⑤ 解釈的現象学・・・・・・・・・・（西村ユミ）
- ⑥ アクションリサーチ・・・・・・・・・・（ハッ塚一郎）

各発表の終了後、簡単な質疑応答を行います。また、全体討論も行います。

※大会2日目にはいくつかの技法についての講習会を実施します（大会参加者限定：事前申込制）。くわしくは次頁をご覧ください。

講習会

※講習会には事前申し込みが必要です。大会公式ウェブサイトからお申し込み下さい。申し込み締切りは10月23日22時の予定です。下記の参加条件、及び申し込みサイトの条件をよく読んでお申し込みください。講習会へ参加いただけるのは大会参加者のみです。

講習会1「作業感を減らして楽しくオープン・コーディングをしてみよう」

講師：日高友郎(福島県立医科大学)

日時：10/25（日）9：00～11：00(本講習会だけ日時が異なります。ご注意ください。)

概要：質的データ分析の方法の一つであるオープン・コーディングでは、具体的な語りやフィールドノーツの記載をまとめあげ、抽象的な概念の形に置き換えていく。一方、分析の過程においては「既存の概念への分類作業になってしまう」等の悩みを持つことも多い。本講習会では、作業感をなるべく軽減し、分析の過程を研究者自身が楽しみながら、新たな視点・概念を得ることを目標とし、オープン・コーディングの基本的な手続きを学ぶ機会としたい。

受講者に必要な条件：『質的研究法マッピング』の「オープン・コーディング」の章(p72-79)を事前にご一読ください。当日の用意は特に必要ありません。

時間：120分

方法：Zoom等のオンライン講演の形式を取りつつ、実際の分析作業を軽く実施します。

講習会2「解釈学的現象学の基本と具体的な方法を学ぶ」

講師：西村ユミ・村上優子(東京都立大学)

日時：10/25（日） 16：30～18：30

概要：解釈的現象学は、研究者自身の先行理解を更新させることで、探究しようとする経験の理解（解釈）をすすめる方法である。ここでの更新は、自身の前提を“打ち砕く”ような経験にもなりうる。他方で、他者の経験を理解しつつ、自らの先行理解を更新させ、両者の地平を融合させて新たな理解を作ること、発見の連続でもある。本講習会では、この方法の基盤となっている現象学・解釈学と具体的な分析例を紹介し、一緒に理解を作ってみたい。

受講者に必要な条件：現在取り組んでいる研究に関する自分の先行理解（先入見、先入観、ものの見方のくせ）を考えてくる。

時間：120分

方法：講義＋実習（例示するトランスクリプトの解釈を試みる）

講習会3「複線径路等至性モデリング(TEM)を学ぶー過程と発生をとらえる TEA の技法」

講師：安田裕子(立命館大学)

日時：10/25（日） 16：30～18：00

概要：TEA は等至性 (Equifinality) の概念を組み込み開発された。等至性の概念では、人間を開放システムととらえ、非可逆的な時間と文化的・社会的な影響のもと、多様な軌跡を辿りながらもある定常状態に等しく (Equi) 到達する存在であると考え。TEA はその中心を TEM におく。人の発達や人生径路の複線性・多様性、潜在性・可能性を、プロセスとしてとらえる TEM について、その基本的な概念や考え方を習得したうえで、ペアワークにより理解を深める。

受講者に必要な条件：大学院に進学を決めた経緯について記述したもの（400 字程度、フィクションでも結構です。ペアで共有しますのでその点お含みおきください。）、A4 サイズ白紙の用紙、マジックペン（書いたものが画面越しにくっきりみえるように）

時間：90 分

方法：講義＋実習（ペアワーク）

講習会4「KJ 法をいかした質的分析」

講師：田垣正晋(大阪府立大学)

日時：10/25（日） 16：30～18：30

概要：インタビューデータの KJ 法に依拠した分析について、データ収集から分析、文章化と図解化、そして論文投稿に至るまでを説明する。KJ 法は、グラウンディッドセオリー法 (GT 法) とほぼ同時期に我が国で開発された。その手法開発場面は、KJ 法では農村地域、GT 法では医療場面であり、このことが両者の違いをもたらしているだろう。講習では、海外誌に投稿する際の KJ 法の説明についても言及する。なお自治体の調査における質的データ（自由記述、グループインタビュー）の分析支援についても、受講生の要望があれば説明する。

受講者に必要な条件：想定される対象者：特に指定しません。分析例として、医療、看護など「病」「障害者」「福祉」関連の話題を扱います。自治体の自由記述データの分析経験が多いので、自治体職員で、調査を担当する方にも参考になると思います。

- ・事前に読むことが望ましい文献（2 は検索でダウンロードできます）(1) 田垣正晋 (2019) KJ 法 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編 ワードマップ質的研究法 マッピング 新曜社、pp. 52-58 / (2) 田垣正晋 (2014) 脊髄損傷者のライフストーリーから見る中途肢体障害者の障害の意味の長期的変化：両価的視点からの検討 発達心理学研究 25(2), 172-182.

時間：120 分弱（途中で質問をいれます）

方法：講義＋実習（ちょっとした課題を出します。）

抄 録 集

「Relational Being」関係からはじまる

—ガーゲンがひらく新たな知の地平—

企画：鮫島輝美（京都光華女子大学健康科学部）

：東村知子（京都教育大学教育学部）

話題提供：永田素彦（京都大学総合人間学部）

安永 悟（久留米大学文学部）

てるくん（無所属）

指定討論：矢守克也（京都大学防災研究所）

企画趣旨

2020年9月ケネス・J・ガーゲンの著書「Relational Being」の翻訳書「関係からはじまる」が刊行された。本書の最大の魅力は、「なぜ争いが起こるのか」といった現在私たちが直面している多くの実践的な課題、について、徹底的に「関係の総体（集合）」という視点から考え、対立や紛争の絶えないこの時代にあっても、希望をもって一人ひとりのウェルビーイングを支える新たな知の地平を切り開こうとしている点にある。その核となるのが、従来の人間観「Bounded-Being:境界画定的存在」——バラバラの個人がまず存在し、個人が集まったときに関係が生じる——を乗り越えた「Relational Being:関係規定的存在」——個人も含むあらゆるものは関係的なプロセスから生まれる——という新たな人間観である。本シンポジウムでは、この新しい関係の見方がどのように私たちの日常生活や研究実践に結びつき、またそれらを変えることができるのか、をテーマとする対話を試みたい。

企画者は、本著の翻訳に従事し、大きな学びと気づきが与えられている。鮫島は、看護学において大切にされている「全人的」という人間観にとって代わるような新たなアプローチの可能性に気づき、「関係規定的存在」という言葉が与えられたことによって新たな対話がひらかれると感じている。また、東村は、通常は個人に帰属するものとみなされている「評価」や「責任」を、関係のなかに位置づけることで、自身のフィールドと教育実践を新たな視点で捉えることができるようになった。

話題提供者は、以下の3名にお願いしている。

話題提供2：永田素彦（京都大学総合人間学部学部）

他者と「ともに」する研究

『関係からはじまる』において、ガーゲンは「境界画定的存在」の人間観・世界観を乗り越える新たな人間観・世界観として「関係規定的存在」を提示している。世界を境界

画定的存在からなるとみなすか、関係規定的存在からなるとみなすかによって、研究のありかた、さらには研究者の生きざまは大きく異なる。後者の見方をとれば、研究という営みは、研究とは独立に存在する現象を明らかにするものではなく、必然的に現象そのものを構成する営み（の一つ）ということになるからだ。私自身は、『社会構成主義の理論と実践―関係が現実をつくる』の翻訳をするなど、これまでガーゲンの著作に触れる機会に恵まれ、多くの魅力的な理論や概念に大いに刺激を受けてきた。今回はその中でも特に「協応行為」に注目し、それが研究のありかたに対してもつ意味を、自分自身のフィールド研究を引き合いに出しながら考えてみたい。

話題提供2：安永 悟（久留米大学文学部）

私の専門は協同学習である。協同学習による授業の活性化をスローガンに掲げて、大学での授業実践に加えて、小学校から専門学校・大学までの教師を対象とした各種の研修を長らく続けている。幸いなことに、研修に対しては一定の評価を得ることができており、協同学習に期待を寄せる声も少なからずいただく。しかし残念なことに、期待したほどには協同学習が教育現場に浸透していない。この現状をいかに打開すべきか悩んでいたときに、出会ったのがガーゲンの翻訳書であった。

協同学習では当然ながら学習仲間の関係性を強調する。個人的には「協同の精神」を提唱し、仲間同士が連携協力することの意味と意義、その成果を説いてきた。しかし、その説明はガーゲンのいう「境界画定的存在」としての個人を前提とした因果関係モデルに閉じており、協同学習で伝えたい本来の「協同」の良さを十分に伝えることができていなかったのではないかという疑念が沸いてきた。本シンポジウムでは、ガーゲンのいう「関係」の観点から協同学習についての理解を深め、研修に参加する教師の実践意欲を高める方策を考えるきっかけにしたい。

話題提供3：てるくん

高石市で、1人で倒れていたり動けなかったりする時は自分一人の世界であり、「対話」の相手が存在せず自分の事ばかり延々と考えている時間が多くなると死にたくなる。電話などで親しい人と話すことによって、その時間に限っては少し動いたり喋ったりできる事も多いが、それが途絶えてまた一人になると、苦しくなってしまう。

京都に来てからは、蛤御門、京都御所、おしやれ王将、鴨川、銭湯、京都新聞を読むなど「外」の世界に自然と視線が向くようになった。歴史や街並み、そこに集う人びとの出会い、それこそが、発見であり、場所が変わることによって「多彩なもの」と出会い、世界との関係性を再定義することができた。

会員企画シンポジウム 1B 10月24日 16:00–18:00

ヤーン・ヴァルシナーの 「AN INVITATION TO CULTURAL PSYCHOLOGY」を読む ー文化心理学の理論的背景とスコープー

企画・司会：宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）

話題提供：小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）

上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

卒田卓也（近畿大学心理臨床・教育相談センター）

田中千尋（立命館大学大学院人間科学研究科）

伴野崇生（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科）

横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科）

指定討論：滑田明暢（静岡大学大学教育センター）

企画趣旨

本企画は、現代における文化心理学の代表的理論家の一人であるヴァルシナーの著作「AN INVITATION TO CULTURAL PSYCHOLOGY」(Valsiner, 2014)の内容をディスカッションし、文化心理学に関するヴァルシナーの理論について理解を深めることを目的とした公開読書会である。

ヴァルシナーは、自身と文化心理学の関わりについて、文化に関する不明瞭な概念を記号的媒介というはるかに制限された概念に翻訳するという解法を見つけてから、文化心理学のアイデンティティが自分自身に受け入れられるものになったと述べている (Valsiner, 2013/2007)。このようにヴァルシナーの文化心理学は、動物との対比の中で、人間の基本的な活動が意味づけ、すなわち記号の創造と使用であることを強調したヴィゴツキー(В ы г о т с к и й, 2005/1983)に依拠しており、ヴァルシナーは、文化とは記号による調整 (semiotic mediation) であると定義している (Valsiner, 2017)。

企画者らは現在当該本の翻訳プロジェクトを進めており、これまで数カ月に渡り議論を重ねてきた。本企画では、ヴァルシナーの文化心理学の理論的な背景とスコープについて要約的な解説を行った上で、本書の各章のエッセンスについて話題提供を行う。これまでの議論を通じて企画者らが現在進行形で抱えている問題意識や悩みを参加者の方々と共有し、参加者の方々との議論を通じて、ヴァルシナーの理論への理解を深めるとともに、今後の翻訳プロジェクトの推進につなげたい。

話題提供（宮下、小澤、上川、卒田、田中、伴野、横山）

ヴァルシナーの文化心理学の理論的な背景とスコープについて要約的な解説を行った上で、本書の各章のエッセンスについて話題提供を行う。本書の各章のタイトルは以下の通り。

CHAPTER 1: HUMAN EXPERIENCE THROUGH THE LENS OF CULTURE: AN INVITATION TO PSYCHOLOGY IN A NEW KEY

CHAPTER 2: WHAT IS CULTURE? AND WHY HUMAN PSYCHOLOGY NEEDS TO BE CULTURAL?

CHAPTER 3: CO-CONSTRUCTING THE MIND SOCIALLY: BEYOND A COMMUNION

CHAPTER 4: CULTURAL PROCESSES ON THE BORDERS: CONSTRUCTIVE INTERNALIZATION AND EXTERNALIZATION

CHAPTER 5: CREATING OURSELVES: SIGNS, MYTHS, AND RESISTANCES

CHAPTER 6: SIGN HIERARCHIES: THEIR CONSTRUCTION, USE, AND DEMOLITION

CHAPTER 7: HOW CULTURE IS MADE THROUGH OBJECTS

CHAPTER 8: CULTIVATING ENVIRONMENTS: OVER-DETERMINATION BY MEANING

CHAPTER 9: WEAVING SOCIAL TEXTURES TOGETHER: PERSONAL AND COLLECTIVE CULTURE IN ACTION

CHAPTER 10: SIGNS AS ORGANIZERS: MAINTAINING AND INNOVATING TENSIONS

指定討論：滑田明暢（静岡大学大学教育センター）

質的心理学会第 16 回大会におけるヴァルシナーの基調講演「REMAINING ELEGANT :Fifteen years of qualitative psychology in Japan」をはじめ、ヴァルシナー来日時に多くの同時通訳を務めた経験のある滑田先生に、話題提供に対する参加者の方々とのディスカッションをリードするファシリテーターをお願いしている。

引用文献

- ヴィゴツキー, Л. С. (2005/1983). 文化的一歴史的な精神発達理論 (柴田義松, 訳). 学文社
- ヴァルシナー, J. (2013). 新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化 (サトウ タツヤ, 監訳). 新曜社 (Valsiner, J. (2007). *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. California: SAGE Publications)
- Valsiner, J. (2014). *An invitation to cultural psychology*. Thousand Oaks, CA, US: Sage Publications, Inc
- Valsiner, J. (2017). *BETWEEN SELF AND SOCIETIES: Creating psychology in a new key*. Tallinn University Press.

対話的自己エスノグラフィにおける対話者の存在

企画：沖潮 満里子（湘北短期大学生生活プロデュース学科）

司会：沖潮 満里子（湘北短期大学生生活プロデュース学科）

話題提供：沖潮 満里子（湘北短期大学生生活プロデュース学科）

伊藤 哲司（茨城大学人文社会科学部）

斎藤 清二（立命館大学総合心理学部）

指定討論：松嶋 秀明（滋賀県立大学人間文化学部）

企画趣旨

対話的自己エスノグラフィは、質的心理学研究 12 号で発表された沖潮（2013）の論文「対話的な自己エスノグラフィ——語り合いを通じた新たな質的研究の試み」で提案されたものである。これは、従来研究者が単独で行う自己エスノグラフィ研究に、対話者を設定し、研究者と対話者による語り合いあるいは対話を通して、研究者の自己エスノグラフィ実践を遂行していくものである。この論文の発表以降、自己エスノグラフィに挑戦しようとする研究者をはじめ、学位論文の一環として取り組む学生も近年増えてきた。そこで、普段は自己エスノグラフィを実施する研究者による研究に焦点が当てられているが、ここで一度、対話的自己エスノグラフィにおいて欠かせない対話者の存在について再検討したい。今回のシンポジウムでは、対話的自己エスノグラフィの対話者を経験したそれぞれの話題提供者から、自身の経験について、そして、対話者のありようや役割、留意点等を共有し、対話者の存在について見つめていきたい。さらには、今後の対話的自己エスノグラフィの発展に向けた理論的な整理等の議論を展開していきたい。指定討論者の松嶋氏からは、対話的自己エスノグラフィにおける、研究者と対話者のつながりや関係性についての議論、今後の発展に向けた論点整理等をしていただく。

話題提供 1：対話者のありようを見つめなおすー対話者と研究者双方の経験からー

沖潮 満里子（湘北短期大学生生活プロデュース学科）

沖潮は、対話的自己エスノグラフィを用いた研究における、研究者と対話者の両方を経験している。研究者としては、沖潮（2016）など、障害者のきょうだいとしての自身の経験についてまとめた。そして兄を小児がんで亡くした妹の対話的自己エスノグラフィ（若子・沖潮, 2020）において対話者の役割を担った。今回の話題提供では、それぞれの立場を経験して見えてきた、対話的自己エスノグラフィという方法の可能性について論じていきたい。まずは、それぞれの経験がどのようなものだったのかについて振り返る。次いで、対話者としての経験に焦点を当て考察を進めていく。若子・沖潮

(2020) では、研究者である若子が「病児のきょうだい」であり、対話者の沖潮が「障害者のきょうだい」であった。いわゆる“きょうだい”としての当事者性を互いが抱えるなかでの対話的自己エスノグラフィであり、沖潮が研究者であった実践とは大きく異なる側面である。沖潮(2013)では、対話者の資質や留意点について言及されているが、研究者と対話者それぞれが研究テーマに関する属性や立場などを共有する際に考慮できる点や留意点などについても考察していきたい。

話題提供2：対話的自己エスノグラフィの対話者になるということ。伊藤 哲司（茨城大学人文社会科学部）

自己と文化の関係、自己と他者との関係を深く掘り下げていく際に、対話的自己エスノグラフィは魅力的な方法である。当事者であることを意識して研究を行う人にとって、当事者である自分の分析に使えるツールとなる。自己を個のなかに閉じ込めず、対話者を設定することで、その対話のやりとりや関係性のなかに位置づけるというのは、たしかに卓越した方法である。この場合有意義なのは、対話的自己エスノグラフィの実践者、すなわちそれによって自己について書こうとしている当人にとってだけでなく、対話者にとってもだということを目指したい。もともとの関係性（たとえば友人同士、先輩と後輩、親と子、指導教員と学生）とは別の関係性がそこに構築され、対話者もそのなかで与えられた役割を演じる。相手への過度な共感を控えつつも、それまでにないまなざしを相手に向けることにもなる。それが、もともとの関係性にどのような影響を与えるのか。その点について私自身が指導生の対話者になった経験をもとに考えてみたい。それがまた、もうひとつの対話的自己エスノグラフィになりうる可能性があるのではなかろうか。

話題提供3：対話的自己エスノグラフィにおける足場づくり—メタエスノグラフィによる検討—。斎藤 清二（立命館大学総合心理学部）

質的研究における自己エスノグラフィへの関心が急速に高まっている中、沖潮(2013)が提唱した対話的自己エスノグラフィは、そのメリットを増強しデメリットを軽減するための優れた方法である。特に心理学/対人援助学領域の学部生、大学院生にとって、自己エスノグラフィ研究を行うことは、職業人として必須の自己理解を深め、自己変容を促す貴重な経験的学習の機会となる。一方でこのような研究プロセスにおいては、対話者が共同研究者、指導教員、支援者などの複数の異なった役割を要請されること、その結果、研究者と対話者間の複雑で重層的な関係が必然的に生ずることなど、難しい点も存在する。今回の話題提供では、卒論ゼミの学部生が行った対話的自己エスノグラフィ研究（柳川・斎藤, 2020）を題材に取り上げ、研究の進行プロセスをメタエスノグラフィ的に描写する。それを通じて、以下の問題点を主として対話者の観点から検討したい。

- ①研究者の主体性と自律性を尊重しつつ研究の足場づくりを促進するための工夫。
- ②研究者と対話者間に生じる多様な関係性を研究の駆動力として活用するための工夫。
- ③自己エスノグラフィ研究に内在する危険性や倫理的葛藤を最小限にするための工夫。

ポスト質的心理学とこれからのアクションリサーチ

—世界的危機の恒常化時代を迎えて—

企画・話題提供：日比野愛子（弘前大学人文社会科学部）
宮本匠（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科）
山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）
大石尚子（龍谷大学政策学部政策学科）
企画・指定討論：香川秀太（青山学院大学社会情報学部）
司 会：河合直樹（札幌学院大学人文学部人間科学科）

企画趣旨

本シンポジウムでは、先達の質的研究やアクションリサーチの方向性をいったん総括し、これからの方向性、すなわち、ポスト質的研究ないしポスト・アクションリサーチについて検討する。

危機を煽るまでもなく、これまでは「アタリマエ」だった社会の構造が根底から揺さぶられている。コロナ禍においては、これまで通りに経済を回せないことがいかに人類に致命的なのかを我々は実感し、これから大失業時代を迎えるとも言われている。また、温暖化の影響により、毎年、台風や大雨・大洪水被害が起こり、安心した居住すら危うい。私たちは、質的研究でしばしばいわれてきた「世の中のアタリマエを疑おう」という呼びかけ以前に、既に前提を疑わざるをえない状況や時代に突入している。

この危機状況は、一方の極にあつて、現代社会の中軸である「貨幣経済の成長」と、他方の極にあり、不都合な真実とされてきた、「自然環境の破壊」や「生命・幸福の減退」とのダブルバインドとして言い換えられる。これまでは、水面下にあり時折、表面化し自覚を促されるという「潜在的な矛盾の断続的顕在化」の時代にあつたのに対し、昨今は、常に矛盾が表出し続け、目を背けることができないという「矛盾の恒常的顕在化」の時代へ突入したと言える。否応なく、社会変革が促される時代なのである。

振り返れば、マルクスとエンゲルスは、まさに資本主義の諸矛盾を論じた。彼らの史的唯物論は、我々がよく知る状況論、活動理論、社会構成主義、質的心理学につながった。しかし、そこでの世界史的な社会変革志向は表舞台から退き、ローカルな各フィールドへの調査やアクションが中心に置かれてきた。よって、ここでさらに必要なのは、まさしく「我々はどのような世界形成をのぞむのか」という問いである。マルクスらに従えば、そもそも、物質的な諸関係を出発点とすることは、同時に、世界史的な社会変革を志向することと切り離せない。そこにマクロとミクロの二元性は存在しない。

以上をふまえ、本シンポジウムでは、時に競合する個々の研究という従来枠を越え、各々の特異な研究内容を結合することを目指して、これからのアクションの在り方、つまり、地球規模のコモン創出に向けたローカルな連帯の在り方の可能性と課題を探る。

話題提供 1：日比野愛子（弘前大学人文社会科学部）

生命らしきものがあふれる世界：ポストヒューマン・アクションリサーチ アクションリサーチは、これまで自然科学の乗り越えを意識しながら、多くの社会的課題に関与してきた。しかし、環境問題はじめ、自然科学だけでは解決できないトランスサイエンスの問題が常態化する現況にあって、アクションリサーチの可能性があらためて問われている。このとき、言語化から離れる道と、言語化にこだわる道があるのではないか。後者に関しては自然や人工物への意味付与がカギであり、培養肉等の事例を取り上げながらこの問題への試論を述べたい。

話題提供 2：宮本匠（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科）

アクションリサーチの黄昏 現代社会のアクションリサーチの困難は、眼前の課題があまりに深刻であったり、そもそも積極的な未来が描くことが絶望的に感じられるため、問題に向き合う主体性が脆弱となったり、ともすれば問題そのものを否認しようとするところにある。このような主体性の喪失の危機、問題の否認という右肩下がりが前提となる現代社会特有の現象を前に、アクションリサーチはどのように存在しうなのか、アクションリサーチが前提とするパラダイムそのものの再検討も含めて考えてみたい。

話題提供 3：山口洋典（立命館大学共通教育推進機構）

ピア・サポートの促進を通じた学びのコミュニティのデザイン コロナ禍の中、教育現場では緊急対応としてのオンライン授業に奮闘された。一方で、パンデミック以前より、AI化・ロボット化した社会・経済を闊歩できる「ロボット・プルーフ（Robot-Proof）」（ジョセフ・アウン）な卒業生の輩出が必要と指摘されていた。転じて、「銀行型教育」（パウロ・フレイレ）に抗うオルタナティブな学びの環境として多様な経験学習が導入されてきている。三密対策が叫ばれる中で、教育者・学習者・実践家の立場を越えた濃密な対話はいかにして可能か、ピア・サポートの視点から報告・検討したい。

話題提供 4：大石尚子（龍谷大学政策学部政策学科）

食農を起点としたソーシャル・イノベーション：マルチチュード的起業家精神の醸成を展望して 今、世界中の農村・農業が危機的状況にある。メジャー企業のフードシステム支配により、世界の90%以上を占める小農が疲弊している。国連の2019年から始まった「家族農業の10年」や「小農の権利宣言」は、その表れである。ここでは、グローバル化に対峙し、持続可能な農村社会実現する鍵として、ネグリ&ハートの「マルチチュード的起業家精神」を提起し、日本やイタリアの事例を紹介しながら、農村に求められるソーシャル・イノベーションについて議論を深めてみたい。

再考，当事者と倫理と研究者

—医療分野における質的研究の貢献—

企 画：渡邊卓也（京都大学医学部附属病院）

司 会：渡邊卓也（京都大学医学部附属病院）

話題提供：渡邊卓也（京都大学医学部附属病院）

松島 淳（佐賀大学医学部）

日高友郎（福島県立医科大学医学部）

福田茉莉（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）

指定討論：春日秀朗（福島県立医科大学医学部）

サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本企画は、2017 年に「当事者」と「倫理」をキーワードに、医療分野における質的研究の位置づけを探索することを目的とした自主シンポジウム「当事者と倫理と研究者：医療分野における質的研究の貢献」での議論を踏まえ、3 年を経て改めて議論を深めることで、医療分野における質的研究の位置づけを展望しようとするものである。

昨今では、医療分野における質的研究を用いた研究実践が社会的にも要請されており、当該学問分野において、質的研究を実践する研究者が増加している。研究倫理に係る社会的な重大事案の発生や研究倫理の考え方そのものの進展により、大学・研究機関において研究倫理に関するガイドラインの厳密性が高まるなか、研究に対する信頼性の維持・回復のためには、各種研究規制の遵守だけでなく社会的受容の観点からの議論も必要である。

とりわけ質的研究においては、インフォームド・コンセント、研究によるリスクとベネフィットの配分、社会的弱者への配慮、研究対象者の個人情報保護など、研究の特質に応じた配慮を要する部分が大きい一方で、研究倫理が積極的に議論される機会は少ない（医療分野での研究となると、やはり典型的な臨床研究の倫理に関する議論が多い）。

本企画では、質的研究の理論的中核をなす現場性や当事者性の重視と倫理の関連について、話題提供者からの話題を踏まえ自由に議論し、これらの知見から医療分野における質的研究の可能性とその貢献について再考する。指定討論者には、春日秀朗氏（福島県立医科大学医学部）、また前回に引き続きサトウタツヤ氏（立命館大学）を迎えコメントを頂戴する。

話題提供 1：渡邊卓也（京都大学医学部附属病院）

所属機関の研究倫理審査に携わる者として、研究倫理審査の最新動向を報告する。いわゆる医学系研究は、時に研究対象者への身体的な侵襲を伴い、医学的妥当性が未確立な介入が施されることもある。当然ながら、研究対象者への倫理的配慮はたいへん重要とされる。一方、人文・社会科学を含む非医学系研究では、研究対象者の個人情報保護やインフォームド・コンセントの適正さのみが、研究倫理審査の論点となりやすい。医学系と非医学系どちらの研究倫理審査（どちらも質的研究の倫理審査が行われている）にも携わっている経験を踏まえ、双方の相違などに触れる。

話題提供 2：松島淳（佐賀大学医学部）

心理臨床の実践において、まず考慮しなければならないことは職業倫理である。専門業務に携わる専門家として個人が自己規律的に真摯に対応しなければならない。さらに、臨床実践を研究として社会に広く発信する際には、専門家としての倫理と研究者としての倫理の双方に配慮し、クライアントと向き合う必要がある。カウンセラーでありながら、研究者として臨床実践に携わる日々の取り組みについて「倫理」の観点を組み込みながら報告する。

話題提供 3：日高友郎（福島県立医科大学医学部）

神経難病者と協働しての研究と実践を展開する中で生じてきた、困難や疑問に焦点を当て、「倫理」の観点から話題提供を行う。重篤な神経難病である筋萎縮性側索硬化症とともに生きる病者に密着し、ライフの厚い記述を蓄積することは、「当事者だから語れること（語れないこと）」と「研究者だから語れること（語れないこと）」についての考察を深める機会ともなった。これらは研究理論・方法論に関わる問題であると同時に、研究倫理に関わる問題でもある。本報告では適宜、具体的な事例を提示しながら、「質的研究と倫理」についての議論を深めることを試みたい。

話題提供 4：福田茉莉（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科）

医師をはじめとする医療従事者と患者との関係性は必ずしも対等とは言えない。医療機関での共同研究において、患者を対象としたニーズ調査を実施する場合には、調査結果をフィードバックすると同時に、調査協力者の権利を擁護し、不利益が生じないように最大限の配慮をする必要がある。特に、社会的マイノリティを対象とする実践では、個人的な問題あるいは社会制度やシステム上の問題と認識されることが強く、調査協力者に利益が直接的に還元されるに至るのが困難なケースがある。本報告では、医療機関と共同で実施した生活困窮を抱える地域住民を支える医療に関する研究実践から、医療者と患者と研究者という三項関係における「倫理」について議論したい。

「土地の力」とレジリエンス 一人々はコロナ禍をどう生き抜こうとしているのかー

企画・司会：村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

話題提供：河野暁子（立命館大学大学院人間科学研究科）

村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

大城凌子（名桜大学人間健康学部）

張 亦瑾（立命館大学大学院人間科学研究科）

伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

企画趣旨

本シンポジウムは、2018年度より継続してきた「土地の力」を巡るものである。「土地の力」とは、それぞれの土地が持つ自然・文化・歴史・地政学的特徴から育まれてきたケアや苦難を生き抜く力を指す。今回は、コロナ禍を、私たちはどのような「土地の力」に頼りながら生き抜こうとしているのか、しばらく続くだろう災禍との付き合い方を学び合うとともに、多様に展開され得る「土地の力」を概念化する一助としたい。

話題提供1：感染症と向き合いながら生きる力 河野暁子（立命館大学）

新型コロナウイルス感染症が全国的にも広がり始めた2020年春、感染者が確認されない状況が続いていた岩手県では、誰もが「感染者第1号になりませんように」という緊張感を持っていた。地域が最も賑わう夏の祭りは早々に中止となっていたが、規模を縮小して民俗芸能が行われたり、予告なしで花火が打ち上げられたりと、感染症対策を取りながら、できることを続けていた。畑で採れた野菜のおすそ分けや散歩途中での立ち話など、日常の中で互いを気遣う行為は、例年よりも活発だったように思われる。自然豊かな岩手県の長い歴史の中で、人々は幾度も災害を乗り越えてきた。その知恵は慣習の中に埋め込まれ、東日本大震災でも力を発揮していたと想像できる。今回の感染症に対しても、一時的な動揺はあったにせよ、淡々と日常を保っていくのかもしれない。

話題提供者2：科学とまじない 村本邦子（立命館大学）

緊急事態宣言下、大阪の町を歩き回り、淀川・大川沿いに多くの災害記念碑や地蔵、神社等を発見し、自らの足元にもあった「土地の力」に気づくことになった。日本一長い天神橋筋商店街はいつもより閑散としていたが、逞しく商売を続ける人々と会話や買い物を楽しむ人々がいた。傍らには、神輿とともに天満宮の「コロナウィルス退散祈願」

のお札が祀られていた。江戸時代、緒方洪庵が疫病対策に取り組む一方、霊験あらたかなパワースポットを紹介した『願懸重宝記』（濱松歌国、1816）や呪力を持つ赤物玩具などがあった。大阪のこのような二重性を中沢（2018）や高島（2012）は、その地形や歴史からひも解く。今この時の経験と重ね合わせながら大阪の「土地の力」を考えてみたい。

話題提供 3：見える距離と離れていく感覚をつなぐ力 大城凌子（名城大学）

沖縄県は人口 10 万人当たりの新型コロナウイルス新規感染者数が全国一多い状況が続いた。県は独自に緊急事態宣言を発令し、観光客への来沖自粛と県民への social distancing を要請した。沖縄の特徴的な年中行事や冠婚葬祭も変わりつつある。家族や親族とのつながりを重視する高齢者は、コロナ禍の収束を祈り、凌いでいる。9 月の旧盆に病気で亡くなった 50 代男性の自宅で営まれた葬儀に参列して驚いた。地域の若者がりんすー（葬式組）を組み、長蛇の弔問客に対応していた。感染対策を講じての葬儀に、遺族はりんすーを諦めていたが「こんな時だから皆で手伝う・」と段取りしてくれたという。生と死の営みさえもアウトソーシングされつつある中、りんすーの文化は、地域の人々をつなぐ力になっていると考える。新しい生活様式が模索される中、日常の中で継承される行事を通して土地の力について考えてみたい。

話題提供 4：民主化による台湾の日常体験と土地の力 張亦瑾（立命館大学）

新型コロナウイルスの世界的流行から、人々の生活は予期せず大きく変わった。各国で異なる感染対策が行われているが、台湾は新型コロナウイルスの封じ込めが一定の成果を上げていることで注目されている。特に、マスメディアの報道により、「鉄人大臣」と呼ばれる保健相や、IT 担当で「天才」と称される政務委員らの活躍が目立つ。台湾出身の発表者は、災害復興や危機対応においては、ただ一人のヒーローがいるだけでは十分でなく、国の民主化以来、政府と市民の信頼関係を構築してきたことが大きな力を持っていると考える。教育現場や社会運動など日常生活の場面を通じて、一国民として体験した台湾の民主化運動を紹介し、台湾における土地の力を明らかにしてみたい。

話題提供 5：俗信を信じさせない政治の力とそれに抗う力 伊藤哲司（茨城大学）

ベトナムでは新型コロナウイルスへの対応はいち早くトップダウンで徹底的な対策がとられた。政府が情報を厳しくコントロールし、俗信に関わるような情報が抑えられ、流した者が罰せられるという状況がある。2003 年に流行した SARS の経験がベースになっている。日本の「アマビエ」を知った知日派のベトナム人女性（日系の保険会社勤務）は、「ベトナムには、そのようなヒーローはいませんよ。困った時に助けてくれたり、すがったり出来るヒーローがいるのは、いいですね」と話した。一方で、ベトナムにおける第二波を予言して的中させたとされる風水師がおり、Facebook でのフォロワーは 20 万人を越している。政府の情報統制とのせめぎ合いが、少なくとも一部では認められる。結果的に感染は低く抑えられており、「土地の力」との関係をさらに検討してみたい。

「リアル」と「ヴァーチャル」の境界を超えて

ー「直接経験」と「間接経験」の議論の先へー

企画：横山 草介（東京都市大学）

司会：横山 草介

話題提供：山本 登志哉（発達支援研究所）

渡辺 謙仁（北海道大学）

指定討論：森 直久（札幌学院大学）

企画趣旨

“The Necessity of Experience”（Reed, E. S, 1996）において Reed は我々の日常経験を「直接経験（一次経験）」と「間接経験（二次経験）」とに概念上区別し、現代社会を生きる我々は「経験（Experience）」の多くの部分を「間接経験」へと移譲してしまったと批判する。ここで言われる「間接経験」とは、誰かによって加工され、編集され、勝手よくパッケージ化された情報を人々が一方向的に享受している状態を指す。Reed は人々がこのような状態にさらされ続けることの帰結を「心の機械化」と呼ぶ。そして、我々が日常生活のなかで五感を使って不確かな環境を探索し、自らにとって意味のある情報を見つけだしていくプロセスが我々の経験の重要な側面であることを強調する。同著における Reed の主張は我々に「直接経験」か「間接経験」かの二者択一を迫るものではない。「間接経験」に重心が傾いている我々の日常に「直接経験」の重要性を想起させ、「経験」のバランスを取り戻そうとするものである。

新型コロナウイルスの流行にともなって我々が直面している「新しい日常」への移行は、ともすれば「間接経験」への傾倒に拍車をかけることになろう。だが、その渦中であって「直接経験」と「間接経験」とのバランスを取り戻すための方途はないのであろうか。Reed の経験論を議論の出発点にして、本シンポジウムを通して考えてみたい。

話題提供 1：山本 登志哉（発達支援研究所）私が見ているリンゴは＜現実＞か？

言語をはじめとする「記号」を用いてコミュニケーションし、また思考する人間にとって「直接経験」が何を意味するのか、何が「間接経験」なのかはそれほど簡単な二分法が可能な問題とは思われない。我々が目の前の赤いものを「リンゴ」として経験すること自体、すでに言語的に間接化された概念枠組みにとらえられた「リンゴ」を体験しているのである。さらに問題はそこにとどまらない。その概念はそれ自体対人コミュニケーションの中で間主観的、さらには共同主観的に形成された「他者を介した体験」という

間接性を離れられないからである。また「今日の前に見えるこのリンゴ」を「昨日もここにあったリンゴ」として体験する場合、それはすでに「過去」に媒介された間接的な体験である。我々の感覚はすでにそのような共同性と一般性の枠とともに成立し、それを離れて存在しえない。すると問題は「直接経験」と「間接経験」が切り離しがたく構造化される、その在り方なのだということになる。発達支援の現場で模索される「遠隔支援」を具体例としながら、今問題になっている「間接経験」とは何なのか、VR や AR の技術が生活の中に入り込んでいく今後の人間世界を見通しつつ考えてみたい。

話題提供 2 : 渡辺 謙仁 (北海道大学) 直接経験と間接経験の二分法に再考を迫る N 次創作

インターネットのユーザーが自ら生成する UGC (User Generated Contents : ユーザー生成コンテンツ) が一般化した現代においては、「直接経験」と「間接経験」は容易に区別できるものではない。UGC では、他の誰かによって加工され、編集され、勝手にパッケージ化された情報を人々が一方的に享受するにとどまらず、そうした情報を自ら再び加工し、編集し、パッケージ化しなおして発信することが連鎖していく「N 次創作」(濱野, 2008) が行われているからである。人々は N 次創作を通じ、自ら経験世界を再構築しているのである。こうした N 次創作はニコニコ動画や Twitter などで盛んにおこなわれているが、バーチャルシンガー「初音ミク」は最も N 次創作されているコンテンツの一つだろう。盛んな N 次創作の結果、初音ミクは地球を飛び出し、金星探査機「あかつき」に多くの人々が描いた様々な初音ミクのイラストが刻まれたパネルが搭載されたほどである。著者が長年フィールドワークをしている、ニコニコ動画を発祥とする初音ミク衛星プロジェクトを巡る N 次創作のあり様の紹介を通じ、直接経験と間接経験の二分法を乗り越える方法を考えたい。

指定討論 : 森 直久 (札幌学院大学) 霊が見えたり、狐や狸に馬鹿されていた時代

接した環境が他者の加工や編集をへていれば間接経験となるのか。自然によって加工された環境と人為による加工を分かちものは何か。他者の指さしによって誘導された環境知覚は間接経験なのか。言語に媒介された直接経験の開示は、聞き手にとっては間接経験なのか。遺跡に直面して過去に思いを馳せる経験は直接経験なのか、間接経験なのか。おそらく二つの経験の境界は曖昧なのだ。話題提供者たちが実例を示しながら十分議論してくれるだろう。一つ気になることがある。環境と接触して直接経験を得るとはどういうことなのだろう。遺跡発掘中に人骨を発見した多国籍調査団があったという。一斉に気分が悪くなる日本人を傍目に、外国人は全く意に介さず発掘を続けたという

(伊藤, 2020)。あるいは 1965 年以降狐に騙される経験を持つ者が極端に減っていったという (内山, 2007)。霊が見えなくなった時代の心理臨床で、霊性がクローズアップされるのはなぜか。これらは文化の影響なのか。文化は知覚を歪めているのか。文化にとらわれないものを直接経験と言うならば実に近代的である。しかし文化媒介の知覚を認めるなら「直接」とはなんだろうか。混乱しながら議論したい。

実践と研究のあいだで

ーその関係性や葛藤、わたしたちはそこで何を見つけるのかー

企画・話題提供：土倉英志（法政大学社会学部）

企画：青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

話題提供：白井裕子（愛知医科大学看護学部）

話題提供：亀井美弥子（湘北短期大学保育学科）

話題提供：松尾奈美（島根大学教育学部）

指定討論：有元典文（横浜国立大学教育学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、実践と研究を兼ねる研究手法である実践研究や実践に近いところから論を立てる研究に焦点をあてる。アクションリサーチ、フィールドワーク、インタビュー、関連する研究手法は様々であろう。こうした研究に取り組んでいると、実践と研究のあいだで葛藤を生じたり、自分の言動の矛盾に苦しんだりすることもあるだろう（鹿嶋，2012）。また、かならずしも意図しないうちに、一方が他方に影響することもある。さらに、実践や研究が影響を受けるにとどまらず、活動を通じて、ほかならぬ研究者自身が影響を被ったり、変容したりすることもあるだろう（土倉，2020）。他方でこうした経験は“何かにふれる”経験でもある。もしかしたらそれは、当初ふれたかったものではないかもしれないが、そこにたしかな手ごたえを感じることもある。研究者は実践と研究のあいだで何を諦めるのだろうか、また、そこで何を見つけるのだろうか。

実践と研究のあいだを生きることは、現実を対象にしたり、動きながら考えることを重視する質的研究ととりわけ関連するといえる。本シンポジウムでは、実践と研究のあいだにおける経験をテーマに議論する。ふだんは論文に示されない経験に焦点をあてることで、その難しさや意義を共有する機会にしたい。（なお本シンポジウムは、日本認知科学会教育環境のデザイン分科会との共催で行われる。）

炊き出しの場で行う野宿生活者への健康支援活動と研究活動：白井裕子

12年程前から炊き出しで健康支援活動を行っている。もともとは、野宿生活者の健康を高める看護の方法を見出すことを目的とする研究活動として開始したものであるが、炊き出しの場では「支援者」として受け入れられている。長い年月の中で個々の野宿生活者とも関係が深まり、対人間的な関係も構築されてきた。しかし、野宿生活者との関係が深まることで、インタビューなど研究協力を依頼しやすいという面もあるが、かえって「研究者」として野宿生活者を対象化して捉えることへの躊躇もある。

また効果的な看護方法を見出すためには、自らが野宿生活者に関わった場面をデータ

とする必要があるが、私自身はその場面を作り出す「実践者」でもあり、一方ではその場面を分析する「研究者」でもある。こうした点に研究データとして科学性に欠けるのではないかという思いもある。

いろいろ迷いながら続けてきた研究活動を、経験を踏まえてお伝えしたい。

研究と実践のあいだを浮遊する立場性：亀井美弥子

研究と実践のあいだというテーマが目の前にある時、私はどのような立場から話せばいいのだろうか。研究という営みに関わる者を研究者と呼ぶとしたら、私はかろうじて研究者と言えるかもしれない。一方で、私たちはみな研究を含むより広い実践世界の一員である。研究者という立場性を背負って他のコミュニティの実践に参加することもある。研究者としての立場性が限りなくあいまいなまま、個人的あるいは公共的な実践に参加する場合もある。ここではあえて後者の問題について取り上げたい。具体的には過去に参加した保育園民営化に関わる保護者活動および現在の教育者としての活動を振り返り、研究と実践をつなぐエージェントとして機能したのか（しているのか）、さらにそれによって研究者あるいは実践者としてのアイデンティティがどのように変化し、その後の研究や実践に対してどのように影響を与えているのか考察する。

A.R. ルリアのロマンティックサイエンス構想の子ども理解研究への示唆：松尾奈美

A.R.ルリア(1902-1977)は、ヴィゴツキーやレオンチェフと共に「文化-歴史学派のトロイカ」と称されたソビエトの認知心理学者である。ルリアは、ヴィゴツキーの言う「心理学の危機」を乗り越えようと、心理学がとるべき科学のあり方として「法則定立的」「個性記述的」な科学を統合するロマンティックサイエンスを構想した。被験者の人となりや生活を理解し引き受けるロマンティックサイエンスの構想は、主に西欧においてマイケル・コールやオリヴァー・サックスらに引き継がれている。

提案者は、教育学の立場から「子ども理解」の意義について検討をしてきた。教師は児童生徒を知ることで、「自己変容」や「自己否定」に追い込まれることがあるが、エビデンスが求められ、科学としてのあり方が問われるなか、「人が人を知る」という人間的な行為をどう扱うことができるのか。本提案では、自身の研究にひきつけながら、ロマンティックサイエンスの継承の方法を検討する。

実践研究という経験学習：土倉英志

筆者は市民を対象にワークショップなどを実施する研究に取りくんできた。筆者にとってこうした実践研究はチャレンジの歴史であり、断念の歴史でもある。理想にたいしてできることはあまりに少ない。それが身に染みてわかっただけでも価値があった、そう強弁したりもする。さて、フィールド研究では、フィールドへの参与にともなって問いが「見えてくる」こと、他ならぬ研究者自身が研究道具であることが指摘される。フィールド研究のプロセスを広義の学びに位置づけてみると、学びは知見になにかをもたらし、逆にみれば、得られる知見は学びのあり方に規定されるとも言える。だとすれば、その学びを理解することは重要であるに違いない。とりわけ実践研究においてはそのことがもつ意味は大きいだろう。こうしたテーマを議論したい。

背中合わせで世界に臨む

—環境、文化を問うことと質的心理学の今とこれから—

企 画：日本質的心理学会研究交流委員会

話 し 手：サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

南 博 文（九州大学大学院人間環境学研究院）

同 行：木 下 寛 子（近畿大学九州短期大学保育科）

企画趣旨

人が生きる場所に臨んで、共に泣き、共に笑い、共に働いて語り合い、そこから生まれてくる言葉に、研究者としての自分の全体重を預ける。そのやり方はそれぞれに違っていても、その可能性を信じて求め続ける熱量は、「新たな心理学の方法論と表現法」へと向かう大きな潮流を生み出し、今も、たくさんの人たちを巻き込んで、絶え間ない議論を呼び起こし続けてきた。しかしこの春、私達は人と会うこと、人と空間を共にすること、どこかに足を運ぶことを極度に遠慮し、警戒する季節を迎えた。そして、それまで当たり前に行っていたことがらの数々を恋しく思いながら（あるいは当たり前にするべきことがらとされていたことの数々の意味を考えながら）、一方で、私達が社会のなかで、他者と共に生きてきた／生きている（共に生きていくしかない）という事実——あるいはそれを支えてくれていた文化や環境に——これまで以上に注意深くなり始めている。

ここに心理学の新しい潮流の熱源になった二人の研究者がいる。ひとりは「社会」や「文化」という言葉のもとで、ひとりひとりの人の語りに際立ってくる個別ながらも歴史的で文化的な生きざまに耳を傾けてきた。ひとりは「環境」や「場所」という言葉のもとで、人の経験と行為に託された、都市の声にならない声に耳を傾けてきた。多様な差異をも抱え込みながら、それぞれがそれぞれのやり方で質的研究の可能性を追求し、人が生きる世界に臨み続けている二人の姿に、そしてその言葉に、世界を知りたいことを欲する一存在（Werner & Kaplan, 1974）として、今とこれからの状況に応答する道筋を構想する機会を求めたい。

※ 対談形式での企画である。参加者との議論は、オンラインでの開催であることを活かし、Zoom のコメント機能等を用いた方法を検討している。

ナラティブを通した意味生成における 多声的空間の場とその意義

ー国際交流学生スタッフ経験についての TEM（複線径路等至性モデリング）図を通したマルチビュー・ダイアログの試みー

企画：山口洋典（立命館大学 共通教育推進機構）

北出慶子（立命館大学 文学部）

話題提供：遠山千佳（立命館大学 法学部）

村山かなえ（立命館大学 国際教育推進機構）

北出慶子（立命館大学 文学部）

指定討論：安田裕子（立命館大学 総合心理学部）

司会：山口洋典（立命館大学 共通教育推進機構）

企画趣旨

ナラティブを通した意味生成（Barkhuizen, 2011）は、話し手（調査協力者、もしくはデータ提供者）と聴き手（調査者）、データとデータ分析者、調査結果の報告者と聴衆や読者、といった様々な研究過程で生じる認知的実践と捉えることができる。このように、経験への意味付けが個々の時空間的文脈の中で随時生まれ刷新されていくことは、ナラティブのだいご味だといえる。しかし、ナラティブを用いた研究は、「インタビュー」データを分析する過程においてデータ協力者と研究者だけに閉じたまま完了に至ることも多く、データの文脈に直接関わっている複数人の視点による相互作用という「マルチビュー」的な意味生成や研究におけるその意義については、発展の余地がある。

本企画では、このようなナラティブの動的な創造性に着目し、複線径路等至性アプローチ（TEA）（サトウ・安田, 2012）の手順により、語り手の経験を時間軸に沿って径路化した TEM 図（複線径路等至性モデリング図）を用いたマルチビューの実施を試みる。TEM 図は、語り手と聴き手による「トランスビュー」（佐藤, 2012）を追求するものであり、カウンセリングなどで実践援用され、語りや解釈を可視化した媒介ツールとしての可能性が期待されている。本企画では、TEM 図作成のもととなった国際交流学生スタッフ経験の語りをしたデータ協力者と研究者以外に、データの社会的文脈に関与した複数の関係者により、TEM 図を通した個々の意味づけについて話題提供を行う。その後、指定討論者として TEA の開発者である安田氏がトランスビューを踏まえたマルチビュー、そして TEA 研究やナラティブの可能性について論じる。データ分析過程において TEM 図を介して複数の立場の参加者が対話するという多声的な場が、当事者、研究者、研究プロジェクトにどのような意義を持つのかをフロアと共に体感する中でナラ

タイプを用いた研究の新たな方向性を探りたい。

話題提供 1 : 村山かなえ (立命館大学国際教育推進機構)・北出慶子 (立命館大学文学部)

まず、本企画で使用する TEM 図の背景理解を目的とし、今回の研究と研究プロジェクトの概要について述べる。本研究は、キャンパス内での正課外での多文化交流プログラムに約1年半の長期にわたり参加した学生スタッフの経験とその経験への意味付けを明らかにすることを目的としている。この学生スタッフ経験者1名の協力により、Web 会議サービスを通し、各2時間程度で3回のインタビューを終えている。2回のインタビュー後、学生スタッフ経験についての変化の経路を可視化した TEM 図草案を作成し、3回目のインタビューでトランスビューを目的とし草案をもとに対話を重ね TEM 図草案を修正し、今回の企画で使用する暫定的 TEM 図として完成させた。

話題提供 2 : 遠山千佳 (立命館大学法学部)・村山かなえ (立命館大学国際教育推進機構)

TEM 図の作成経緯についての説明後、データ協力者らの所属する国際交流学生スタッフのコーディネータである村山氏、共同研究者として同じくインタビューのデータへのトランスビューを重ね TEM 図作成にあたっている遠山氏、そしてデータ協力者である学部生1名の合計3名から今回の TEM 図を通しての気づきや意味付けについて述べ、マルチビューを実施する。データ協力者からは自らの語りから作成された TEM 図を見ての当事者の視点、村山氏は語りに根ざすプログラムの社会的文脈への理解者からの観点、遠山氏からは別の学生スタッフへのインタビュー経験を踏まえた解釈、といった多様な視点から語り、話題提供者間においてのマルチビュー・ダイアログを試みる。なお、当日はデータ協力者の学部生1名が、本人の了解のもと匿名性を担保した上で本企画に参加し、コメントを付す。

指定討論 : 安田裕子 (立命館大学総合心理学部)

TEM 図を通したマルチビュー・ダイアログの試みは、分析の真正性を高めることに加えた意義や可能性が、どうあるのだろうか。トランスビューTEAの開発者の一人である安田氏のコメントを重ね、多声的な場における意味生成の深まりについて、方法論上の更新を行いたい。

本企画は、JSPS 科研費（基盤 C）19K00723 の助成を受けたものです。

安田裕子・サトウタツヤ（編著）（2012）．『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』 誠信書房．

佐藤紀代子（2012）． DV 被害者支援員としての自己形成．安田裕子・サトウタツヤ（編著）『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開』 誠信書房 pp.55-71.

Barkhuizen, G. (2011). Narrative knowledging in TESOL. *TESOL quarterly*, 45(3), 391-414.

現象学的人間科学への招待

—IHSRC 2022 に向けて—

企 画：田中彰吾（東海大学現代教養センター）
司 会：田中彰吾（東海大学現代教養センター）
話題提供：植田嘉好子（川崎医療福祉大学医療福祉学部）
村井尚子（京都女子大学発達教育学部）
渡辺恒夫（東邦大学）
指定討論：西村ユミ（東京都立大学健康福祉学部）

企画趣旨

さまざまな分野での質的研究にとって、現象学はその方法論を支える理論的な源泉であり続けてきた。心理学では、A・ジオルジが1960年代末にアメリカで質的研究としての現象学的心理学を提唱した。その後、定量的方法への懐疑が高まっていたイギリスにも現象学的心理学は広がり、1990年代になるとP・アッシュワースらのシェフィールド学派や、J・スミスによるIPA（解釈的現象学的分析）などが形成された。本企画の関係者もまた、イギリスでの展開の延長線上にあるD・ラングドリッジ『現象学的心理学への招待』（2016年、新曜社）の訳出を通じて、現象学に根ざした質的研究を日本に紹介してきた。その後、現象学的心理学が教育や看護などの分野も巻き込みながら広がる中で「人間科学研究国際会議（International Human Science Research Conference, IHSRC）」という学会が1982年に発足し、現在まで大会が開催され続けている。2022年には東京で開催される予定になっているため、本シンポジウムは、IHSRC 2022年大会に向けて、その準備の一環として企画した。話題提供者は、社会福祉学、教育学、心理学の各分野で現象学的な質的研究を実践する植田・村井・渡辺の三名である。また、指定討論者として、看護学分野でケアの現象学に取り組む西村を迎える。

話題提供1：植田嘉好子（川崎医療福祉大学医療福祉学部）

「ソーシャルワークにおける現象学の意義と可能性」

ソーシャルワークの対象者は、疾病・障害だけでなく、貧困や虐待、社会からの疎外・孤立・差別等、多様な背景をもつ。中には犯罪者やホームレス、外国出身者など一般社会から理解されにくい立場の者も含まれ、この意味でソーシャルワークにおける対象者の理解は、いかにその人に深く歩み寄り、接近した視点に立てるかが課題となる。また、多職種チームで支援するためには、対象者の情報や支援目標を支援者間で共有することが不可欠となる。現場ではしばしば、支援者間のそれぞれの専門性に由来する意見の対

立が見られ、ソーシャルワーカーはその調整を図りつつ、対象者の要支援性だけでなく“生きる主体”としての理解を求めていかねばならない。

ここに、事象を一から捉え直し、認識の構造を解明しながら本質（意味）を取り出す現象学が活用されうる。IHSRC においても各国のソーシャルワーク研究者が現象学的研究を報告しており、それらを紹介しながら、ソーシャルワークにおける現象学の意義と可能性を論じていきたい。

話題提供 2：村井尚子（京都女子大学発達教育学部）

「教育実践を生きられた経験として記述するリフレクションの試み」

教師は責任をもって子どもに関わっているその活動の中で、「何かをなしているときにそのなしていることについてじっくりと考える」ことは困難である。教育的な行為の渦中であってリフレクションは、「単に手近な課題に限定され、制限されたものにすぎ」ない。つまり、教育実践においては、「暗示的で主題化されていない、また非反省的なタイプの意識」が支配的であり、それゆえ、事後的にその行為についてリフレクションを行うことで、その渦中であって教師が「どのように都度都度判断し、行為していたのか」

「その判断と行為を裏付けている教師自身の価値枠組みはどのようなものであるか」を顕在化させることが重要なのである。そうすることで、次に出会う状況において、子どもにとってより善い、あるいはより適切な（タクト豊かな）行為のための準備を調べていくことが可能になるといえる。

本発表では、マックス・ヴァン＝マーネン（Max van Manen, 1942-）の生きられた経験の記述の手法を参照しつつ、教育実践を可能な限り「現にあるがままに」記述することを目指した学生の記述の訓練の成果と課題、その意義について論じたい。

話題提供 3：渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）

「現象学的心理学の発展：当事者視点の人間科学へ向けて」

演者自らの研究を紹介し、現象学が本来、当事者視点の研究であることも示す。

A) 自我体験研究：IHSRC（2009-2012）での発表。自我体験は現象学者 Spiegelberg が *Psychologia*（京大教育刊）に載せた論文(1961)に始まる現象学的心理学のテーマ。演者は IHSRC での発表を *Encyclopaideia, XV(29)* (2011), *質的心理学研究* (2012), 『フッサー心理学宣言』（講談社 2013）に纏めたが、当事者研究であったことも痛感。

B) 夢の現象学：フッサー志向性論に基づく夢の現象学的分析を展開（『夢の現象学・入門』（講談社選書メチエ、2016）、*質的心理学研究* (2018)）。自らの夢日記サイトをデータとし、当事者研究としての方法を明確化。他者、例えば漱石の夢もデータとしたが、「テキストの一人称的読み」で私が漱石であるような可能世界で私の見た夢として分析。

C) コミュ障の批判的ナラティブ現象学（*質的心理学研究* 2019）：ネット相談事例をラングドリッジの Critical Narrative Analysis の簡易版で当事者視点から分析。「他者の心が読めない」という医療教育等オモテ社会での通念とは逆に、「他者の心を読みすぎる」という対人関係過敏が対人回避を招いているのがネット社会でのコミュ障と判明。

ポスト 2020 教育のゆくえ

—新しいパラダイムへのシフトのもとでそだちをささえる—

企画：森 直久(札幌学院大学)・有元典文(横浜国立大学)

司会：森 直久(札幌学院大学)

話題提供：安藤大作(公益社団法人 全国学習塾協会 会長)

河邊昌之(千葉県八千代市立勝田台小学校 教諭)

指定討論：有元典文(横浜国立大学)

企画趣旨

教育は変化の最中にある。学習指導要領が約 10 年ぶりに改訂され、2020 年度より小学校から順に実施される。外国語教育、プログラミング教育、主権者教育などの新たな学ぶ内容の充実と、主体的・対話的・深い学びという新たな学び方が重視されている。2020 年の大学入試センター試験廃止に象徴される大学入試改革に高等教育改革、高校教育改革を加えた高大接続改革も進行中である。我が国の教育環境が大きく変革しようとするその動きは、学制発布、戦後教育改革に続く、明治維新以降の第三の改革とも呼ばれている。文部科学省だけでなく経済産業省や厚生労働省も、グローバル化社会、少子高齢化社会、超スマート化社会(Society 5.0)をみすえた人材育成の道筋を探っている。この流れの中で現在進行していることは、またはこれから見据えるべきは、教育の道具と制度の改変はもちろんのこと、教育観・学習観の発達でもあろう。新しい手法と制度を活かすための新しいパラダイムへのシフトがそこそこで目指されているはずである。その実践の小さな一步一步を研究の言葉で拾い上げ、議論の俎上に載せていきたい。本シンポジウムでは民間教育の立場から安藤大作氏が、公教育の立場から河邊昌之氏が話題提供を行ない、有元典文氏による指定討論ののちフロアを交えた討論に移行する。大変動期の教育を実証的に語ってくれる研究のアイデアを醸成していきたい。

話題提供 1：安藤大作(公益社団法人 全国学習塾協会会長)

一人一人の可能性を最大化させたい思い＝「愛」

教育の本質は「愛」。アクティブラーニングが本質でも、i P a d が本質でもない。手法や道具は、目的に向かうにあたり、それが必要なときに、前に進む追い風として採用するものでしかない。特に民間教育では、対象者への「愛」が欠落してはこの先長く教育事業を継続させることは出来ない。なぜなら顧客に支持されてはじめて教育事業が成立するからであり、顧客はわが子に「愛」を注いでおり。わが子の幸せを願っているからである。つまり顧客との一致フェーズである「その子に愛を注ぐ」ことで手を握り合

わなくてはいけない。スコアの高低だけで民間教育が成り立つ時代ではない。幸せのカタチの多様化、一人一人が個性を輝かせて、可能性を最大化させていくことに導く教育が求められているのは、護送船団方式が未来の幸せを約束してくれる時代の終わりと、個々の可能性と意欲に希望を感じさせる教育からやり直すべき時を迎えているからに他ならない。その本質は、まず「愛」のある眼差しを、対象者に向けるところから始まる。そしてお互いの信頼関係、言葉の力、背中を見せること、考え方を示すこと、「何を教わるか」より「だれから教わりたいか」の時代にシフトしてきている。つまり「人として、選ばれる教育者になる」という視点がより重要になってきている。手法や道具はその次である。民間教育業界では、まず道具や手法を前面に出したところで簡単には支持されない。つまり顧客である保護者や生徒はそれ以前の幸福感までも教育に期待しているからに他ならない。

話題提供2：河邊昌之（千葉県八千代市立勝田台小学校 教諭）

そだちをささえる「リアルごっこ遊び」

子供は遊びの中で学びを深めていく。だからこそ、小学校生活の中で、遊びを用いて学び合える工夫を施す。仲間と学び合え、共同せよと教師が指示をするのではなく、共同して学びたくなる場を仕掛ける。「ごっこ遊び」をしたことがある人は多いだろう。大人の共同の実践を真似する「ごっこ遊び」の代表的な一つに「おままごと」がある。給食当番を「リアルおままごと」として、遊びを通した共同の場を仕掛けた例を紹介する。白衣を着た児童は、レストランの店員へと変装し、当番の仲間はスタッフである。当番表はシフトであり、教室がレストランへと様変わりする。当番の班長は店長だ。その日のシフトとメニューを見て、当番（店員）の動きを朝から考える。〇〇さんは「牛乳」（ドリンク）で、〇〇さんサバの味噌煮（メインデッシュ）とホワイトボードに書き込んでいく。各机上に配膳する当番（ホールスタッフ）は級友（常連さん）に、メニューの説明や挨拶をしながら元気に配り歩く。一人ではできない楽しさが学校では味わえる。一人では考えられないことが、仲間と共に活動することで思いつく。教員も含め、皆がそだちたくなる場づくりの実践報告を行う。

指定討論：有元典文（横浜国立大学） そだちをささえるための共同作業としての教育

教育の目標は「人格の完成」である。誰もがいつも完成に向かう変化の途中にいる。生きるとは変わることだ。教育は今より未来の人生のための準備であり、そだちをささえる営みである。「Life is group work＝人生は共同作業」、ここで人生（生活）とは、具体的には色々な人々の共同作業のことである。教育は学習を通して、知識技能だけでなく、共同作業を学ぶ場になる。大切なことは「共同作業は一人ではできない」という当たり前である。二人以上で一緒に行うから共同作業であり、＜教育＞自体もそのはずだ。つまり教育を行う者の役割は、学習者の発達を学習者と「共に支える」ことだと考えられる。教育とはこう考えると、学習者が未来の自分に向かうための支援という名の共同であり、皆で未来に一步向かおうとする共同作業だと言える、と考えている。民間教育、公教育がどんなそだちのささえ（発達支援）を行なっているのか、当日の報告と対話を楽しみにしている。

言説分析と社会的課題—三人三様よみ比べ（2）

—コロナ禍における言説分析の可能性を求めて—

企画・分析者1：川野健治（立命館大学）

企画・分析者2：ハッ塚一郎（熊本大学）

企画・分析者3：岡部大祐（順天堂大学）

企画趣旨

昨年度の質的心理学会大会で開催した第1回シンポジウムは、幸いなことに多くの方々に興味をお寄せいただき、企画者の予想を上回る好評を得た。社会的課題と向き合うための表現や方法の可能性をさらに検討し、言説分析に関する議論をさらに活発化させるべく、その続編を企画するものである。前回（2019年度大会）の抄録では、

「本シンポジウムは、いわば『句会』をお手本に、3人の分析者が共通の材料について言説分析を披露し、その分析をお互いに、また参加者とともに味わうという企画である。指定討論は置かず、相互の意見交換と参加者の意見を交えて理解を深め、また分析手法の洗練を目指す。なお、分析材料については、当日までのお楽しみ、とさせていただくが、以下に示すように社会病理についてのテキストを選ぶことにした」

とご案内のうえ、「薬物乱用に対する啓発資材（『ダメ。ゼッタイ。』下敷き）」をテキストに選択、三者三様の言説分析と読解（後述）を発表しフロアと意見交換した。

今回も同様の方針で対話を深めたいところであるが、2020年現在、社会的課題を扱ううえでは、いわゆるコロナ禍、新型コロナウイルス感染症（covid-19）をめぐる問題を避けて通ることはできない。現時点でもその展開や収束を見通せず、また生命や健康、経済や安全に多大な影響の出ている問題を扱うことには正直なところ迷いもある。人々の関心も絶えず流転し、さまざまな言説や図像が話題になっては次々と忘れ去られているのも実情のため、テーマやテキストを設定すること自体が困難でもある。

しかし逆に考えれば、混乱の渦中で周流する言説に目を留め分析を行うことには、事態の記録という意味もあるであろう。ことは感染症にとどまらず、その影響や不安から、社会病理と呼ぶに相当する混乱も既に発生している。研究者としてのわれわれ自身も、大学の講義や業務の変革をはじめ、平常でない状態に巻き込まれて久しい。

こうした激変の中で、言説分析は、ある意味では「句会」のように微力で、浮世離れしているともいえる。しかし同時に、どれほどの混乱の中にあっても、むしろ混乱しているからこそ、われわれは言葉を発し、言説に注意を向け、新たな表現を試みずにはいられない。そうした試みを意識的に展開し、その意義や課題を整理しておくことは研究

者の責務でもあるはずである。いわば「吟行」に出向き、あるいは「俳論」を交わすように、コロナ禍という混乱に積極的に目を向け、言説分析の新たなテーマやそれにふさわしい技法とともに模索し、言説分析を行うことの意義やその可能性を検討し直す作業を、昨年度の「句会」に引き続いて行おうというのが、今回のセッションの目的である。

前回と同様、分析材料となるテキストは当日にご披露する予定である。これも前回と同様、登壇者同士での意見交換、さらにフロアからのご意見によって完成するセッションとさせていただきたい。3人の分析者の基本的なスタンスを、前回のシンポジウムでの発表内容の振り返りとともに簡単に紹介しておく。

分析者1の川野は、近年はメンタルヘルス、特に自殺にかかる研究に従事してきた。必要に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。質的心理学会では、ディスコース分析を用いた二つの研究（曾根崎心中、部活）を発表している。昨年のシンポジウムでは、普及啓発下敷きについてマルチモダリティ言説分析（メイナード,2011）を試み、下敷き空間上の「一等地＝おもて面の上部」で、国連の主張と軌を一にしていることを配置とキャラクターで巧みに示し、その権威を借りながらも、主張の独自部分をフォントの色や大きさに強調している点を提示した。ここに、薬物乱用防止にまつわる典型的な間テキスト構造を見出している。

分析者2のハッ塚は、集団力学を専攻し、広義の社会構成主義を理論的な基盤としている。近年はパーカー『ラディカル質的心理学』を手がかりに、アクションリサーチの精神に即したディスコースの分析と実践を模索、教科書や「いじめ」現象等を分析対象としてきた。昨年度のシンポジウムでは、「ダメ。ゼッタイ。」に象徴される現行の薬物依存啓発言説を「専門家領導言説」と位置づけ、専門家が愚かな一般人を指導する形態というその集団力学的構造を摘出した。専門家領導言説が浸透し飽和状態に達することでかつての効力を喪失するに至ったという逆説を指摘するとともに、既存の言説素材を活用し、切り貼りとし組み換えを行って、無力な専門家が随伴することによる、ともに対話して考える啓発という新たな活動を構想し、代替言説のイメージを提案した。

分析者3の岡部は、社会言語的領域や社会心理学領域の影響下で、主にがんにまつわるディスコース分析を行ってきた。近年は、場とディスコースの関係に着目し、エスノグラフィとディスコース分析を合わせた研究も進めている。昨年度のシンポジウムでは、薬物乱用の啓発素材である下敷きについて、発話出来事と語りの出来事の区別、指標性を鍵概念としたディスコース分析を施し、一見すると雑多でまとまりのない印象を受ける素材の「内容」（イラスト、説明、色彩 etc.）が、指標記号を通じていかにまとめあげられ、それを「今、ここ」で手にする、想定されている使用者（＝生徒、青少年、主に男子）に、いかに結び付けられているのかを詳説した。その上で、この素材がどのような形で「啓発」を達成しうるのかについて、生徒・青少年たちにいかにこの素材を脱コンテキスト化し、（たとえば友人同士のふざけ合いなどに）再コンテキスト化するかというエスノグラフィックな分析の方向性を提示した。

Auto-TEM を通した他者との出会い

企画・話題提供：田中千尋（立命館大学大学院人間科学研究科）

司会：渡邊卓也（京都大学医学部附属病院倫理支援部）

話題提供：上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

卒田卓也（近畿大学心理臨床・教育相談センター）

土元哲平（立命館グローバル・イノベーション研究機構）

横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科）

指定討論：香曾我部琢（宮城教育大学教育学部）

企画趣旨(田中千尋)：

Auto-TEM とは調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察するオートエスノグラフィーと、対象者の具体的な経験のプロセスを、時間を捨象せずに描き出すとともに、対象者の経験を社会との関係性の中で理解する複線径路・等至性モデリング (Trajectory Equifinality Model ; TEM, サトウ編 2009, 安田ら編 2012, 2015) の融合を示したものである。ここでいう「auto」とは、単に狭い意味で「研究者自身の経験」に限定されるものではなく、「他者と共有する文化」を理解することであり、その理解のために自ら動く (auto) ことである(土元, 2020)。

本シンポジウムでは、Auto-TEM を用いて自己の経験を振り返り、自己理解のあり様やリフレクションの深化について異文化理解や看護実践、臨床心理、キャリア教育や看護教育といったさまざまな領域から話題提供を行う。それらの具体例をふまえながら、Auto-TEM の今後の発展可能性について考察していきたい。

話題提供 1 : オートエスノグラフィーの記述様式としての Auto-TEM の可能性(土元哲平)

この話題提供では、オートエスノグラフィーの記述様式(mode)としての Auto-TEM が、自己や他者の経験の記述という側面において、いかなる可能性を持ちうるのかについて考えたい。発表者は Auto-TEM を用いて転職におけるキャリア支援に関する研究を行ってきた。そこで、これまでの発表者の研究成果をもとに、Auto-TEM では、どのような経験を描くことが難しいと感じたのか、それを補う上でどのような工夫をしてきたかについて、話題提供を行う。それによって、オートエスノグラフィーとして TEM を実施する意義と今後の展開可能性を考えたい。

話題提供 2 : コトとしての食と自文化への影響—Auto-TEM を用いた考察(上川多恵子)

本発表は自身の異文化体験から肉嫌いの克服をした経験をもとに、「食ること」に関する自文化への影響について考察するものである。発表者は小学1年生の頃に給食で出された食事の影響で脂身が少量でも付いている肉が食べられないようになり、その影響は大学生になるまで続いたという経験をした。サトウ (2015) は、どのように食べるか

ということはコトとしての食（食事）であり、このような問題も文化的要因として重要であるとしている。ここでは文化心理学的立場から「食べること」に関する自文化への影響について Auto-TEM を用いて考察していく。

話題提供 3：複雑な対人援助事例を省察するための Auto-TEM の可能性(横山直子)

発表者は、訪問先で看護師として受け持った脳卒中後遺症者との関係性の一連を、オートエスノグラフィーを援用した Auto-TEM により描き出すことを試みた。発表者は、家族に依存的な脳卒中後遺症者の「やりたいこと（=意思）」を見出すことを重点に置き援助を行っていた。また、訪問看護開始から脳卒中後遺症者と家族のそれぞれの自立（=分離）過程では、脳卒中後遺症者とその家族の複雑な「心情」「疾病」「生活」を紐解いたり意味づけを行いながら、脳卒中後遺症者とその周囲を取り巻く人々の“一筋縄ではいかない”文化を俯瞰していた。これらから、複雑な対人援助事例を省察できる方法として Auto-TEM の可能性を考えたい。

話題提供 4：心理臨床の事例検討における Auto-TEM の可能性(卒田卓也)

心理臨床における事例検討の目的の一つに、カウンセラー自身の成長につなげるという考えがある。カウンセラーの考えや判断は不変ではなく、セッション毎に見立て直したり、セッションの中でもカウンセリングの状況や進捗とともに変化するものである。また、その時々クライアントへの応答の仕方や内容についても、自身のオリエンテーションや価値観などに基づいた選択が常に迫られている。本発表では Auto-TEM を通じて、カウンセラー自身がカウンセリングの流れの中で内省を深め、自己成長につながる事例検討の方法として成立するのかについて考えてみたい。

話題提供 5：Auto-TEM にみる文化とともにある看護教員の力量形成過程(田中千尋)

発表者は看護教員の力量形成過程を明らかにするために TEA（Trajectory Equifinality Approach, サトウ, 2015; 安田, 2015）を用いた研究を行っている。今回、コロナ禍において看護学総合実習を経験した研究者自身を研究対象とし、その経験のプロセスを可視化した（Auto-TEM）。教員は、コロナ禍という未曾有の中、学生、患者、医療スタッフ、学生を取り巻く世界とそこにいる他者に出会うことを通して、自己に対する深い問いと向き合っていた。Auto-TEM を分析の概念ツールに用いることにより、社会や他者との関係から自身の変容プロセスに気付くことができ、リフレクションの深化が示唆された。本発表では特に TLMG に焦点を当て Auto-TEM の発展可能性について考察したい。

指定討論(香曾我部琢)

発表者の概要から、Auto-TEM をオートエスノグラフィーと記述様式として位置づけ、Auto-TEM を用いる利点は、大きく分けて二つあると考えた。一つ目は、自伝的ストーリーの中に埋もれた分岐点の経験の可視化。二つ目は、語られる自己と語る自己の間に介在する他者の存在の顕在化である。この2つの利点が相乗効果を生み、言語データのみで記述される他の様式とは異なる分析の次元を見出すことが可能となるのではないか。本シンポでは、その可能性と限界について議論を参加者とともに深めていきたい。

日常／非常時における家族、対人サービス専門職、行政、 社会、国家との関係性を問い直す

ーコロナ禍において浮かびあがってきたことー

企 画 : 河原智江 (共立女子大学看護学部)
 西村ユミ (東京都立大学健康福祉学部)
司 会 : 河原智江 (共立女子大学看護学部)
話題提供①: 認知症高齢者の家族介護者
話題提供②: 在宅療養児の家族介護者
話題提供③: 野本 学 (世田谷区障害福祉部)
話題提供④: 河原智江 (共立女子大学看護学部)
指定討論 : 西村ユミ (東京都立大学健康福祉学部)

企画趣旨

今年の1月頃から、新型コロナウイルス感染症が全世界的に拡がり、世界中の人々がこれまで経験したことがないことばかりに直面している。当初はウイルスの正体や対応が全く不明であり、数ヵ月を経てわかってきたこともあるが、治療法を始めとしていまだ全容は明らかになっていない。

自分自身の感染を予防すること、感染の拡大を予防するために、「3つの密」を避ける行動が求められ、人々は、それに従っている。これは、個人の生活スタイル、働き方、価値、信念のみでなく、家族、対人サービス専門職、行政、そして、社会、国家とのつきあい方にも影響を与えている。また、これまで「ふつう」に、当たり前のこととして意識してきたことであろうとなかろうと、今後は、人々の生活に関わる全ての枠組みを大転換していくことが必要になっていると思われる。

このように、多くの人々は、「非日常 (コロナ禍)」により、これまでの「日常」が「非常時 (コロナ禍)」となってしまったわけだが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえると、今の「非日常」が「日常」となっていくことが容易に想定できる。

そこで、話題提供者それぞれの立場から、コロナ禍前後での家族、対人サービス専門職、行政、社会、国家との関係性について、いくつかのエピソードを紹介し、そこから、コロナ禍で浮かびあがってきたことを議論していきたいと考えている。

話題提供①／話題提供②

話題提供①は、若年性アルツハイマー型認知症の妻を介護している夫である。現在、妻は施設に入所している。話題提供②は、人工呼吸器を使用しながら、小学校に通っている6年生の子どもの母親である。

話題提供者である①、②ともに、在宅での療養生活は10年以上であるが、彼らはこれまで、「非常時」に備えて「日常」的にそれに備え、備えていても「非日常」になってしまふことを繰り返しながら、「日常化」してきた経験があると考えている。

「非日常」のコロナ禍での生活は、彼らにとってどのような体験であったのか、そして、これらは彼らにとってどのような意味があるのかなどについて述べる。

話題提供③：野本 学（世田谷区障害福祉部）

コロナ禍において、行政は、刻々と変化する情勢を的確に把握して方針を決定し、対策を実行していく役割がある。いわば、これは危機管理であるが、それと合わせて、これまで取り組んでいる行政サービスを滞ることなく提供していかなければならない。

野本が担当する精神保健福祉施策においては、精神障害の方々、家族、それらの方々を支援する関係者、住民の方々と直接、話し合う場を持ち、協議をし、合意を得ながら対策を検討していくことが必須である。しかしながら、ソーシャルディスタンスという点においては、直接会うこと、話し合う場の設定や交流する機会を持つことが難しいということは大きな問題である。従来の方法の再検討も重要なことであるが、直接会わなくても、適切に行政サービスを提供したり、合意形成を進めていく方策はたくさんあるはずである。また、コロナ禍の中で、行政担当者という立場から、改めて見えてきた精神障害の方々を取り巻く状況及び社会との関係についても述べたいと考えている。

話題提供④：河原智江（共立女子大学看護学部）

これまで私たちは、「国家」をどのくらい意識して生活してきただろうか？河原は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大とともに、私たちの意識や行動は、明らかに変化したと思っている。家族、対人サービス専門職、行政、社会それぞれと国家との関係について考えてみたいと思っている。

指定討論：西村ユミ（東京都立大学健康福祉学部）

話題提供①～④を踏まえ、以下の論点を整理し、本シンポジウム参加者のコメントも参考にしながら、さらに議論を展開していく。

- ・ 「日常」から「非日常」、「非日常」から「日常」への転換はどのように起こったのか？ その時、人々はいかなる営みをしていたのか？
- ・ 療養児・者、家族や行政担当者が、社会や国家といかに付き合ったり、関係したり、場合によっては、距離をとったりしているのか／してきたか？
- ・ それらの経験の中で、これまでの生活と対比したときに見えてくることは何か？

注) 本シンポジウムにおける障害の表記は「障害」とする。

技能を見つめて

企画：竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）
海老田大五朗（新潟青陵大学福祉心理学部）
田中大介（自治医科大学医学部）
話題提供：吉川侑輝（立教大学 社会学部）
松熊亮（東京都立大学人文科学研究科）
竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

企画趣旨

1950年代を前後して、身体的な知性への捉え直しが図られる中で、技能は学際的に注目を浴びることになる。一般的に言えば、技能や技術、わざと聞けば、工芸や芸能、スポーツなど極めて身体的なものを想起することであろう。しかし、チェスや将棋など認知的な技能を要求されるものもある。そこで、本研究では技能・技術・わざを「経験を通じて獲得された実践的な知識」と定義する。

技能に関する研究は、80年代、90年代と心理学や人類学、社会学などと接合しながら、領域を超えて注目されることになった。特に相互に強い影響を与え合ったのが90年代前後に注目されることになる、状況的認知論であろう。心理学、人類学、社会学というディシプリンを超えて、日常的な文脈のなかで人はいかに認知し、協力を行うのかということが研究されてきた。

2000年に入り、さらに20年がたとうとする今、それぞれの領域の中で技能に関する研究が進展をしてきている。そこで、本シンポジウムでは各分野の技能研究に関する今をみつめ、各分野での技能に関する研究を取り上げ、今後の技能研究の行方を議論する。

話題提供1：吉川侑輝（立教大学 社会学部）

本稿が試みるのは、「練習」という活動が備える特徴を検討することを通じて、技能・技術・わざをめぐる人々の実践にアプローチすることである。

本稿は、次のような見立てから開始される。すなわち人々の技能は、研究者たちによって科学的に探求される以前に、研究対象である当の人々によってすでに日常的に探求されている。ゆえに技能というものを、その日常的な探求の只中において、当の人々自身の方法にそくして探求し直していくという方針があってよい。

こうした見立てのもとで本稿は、レッスンやリハーサルとなどといった楽器演奏にかかわる練習活動をひとつのフィールドとして、人々の技能をめぐる日常的な探求それ自体を明確にしていくことを試みる。より具体的には、エスノメソドロジーに方向づけられた経験的な練習活動の研究（『質的心理学フォーラム』12号における特集「技能を見

つめる」に所収の「音楽活動のなかのマルチモダリティー演奏をつうじたアカウンタビリティの編成」を含む)の検討を通じて、活動の只中において振る舞いを説明可能なものとして編成するいくつかのやり方を明らかにする。

上記の検討を通じて本稿は、練習という活動を構成する相互行為、活動のユニット、あるいは個別の練習を超えたより大きな構造を明確にし、技能研究への含意をその課題を含めて議論する。

話題提供2：松熊亮（東京都立大学人文科学研究科）

技能研究は、「経験を通じて獲得された実践的な知識」にもとづく行動を扱い、その行動のメカニズムや実践上の意義を問うものと定義できよう。発表者は、人の職業的発達プロセスや人が特に仕事を通じて学ぶものの理解を目的として、職業実践における技能に着目している。本発表では、現場経験3年目のパティシエの業務におけるスランプを検討し、人が仕事において「一人前」になるとはどういうことかに接近する。

対象パティシエのスランプは、所属する洋菓子店である重要な業務を任されたのちに生じたものであり、業務における技術的学習の停滞を主訴としていた。そのため、一見するとこのスランプはケーキ作りに関する知識や技術、それらの学習の問題が浮かび上がっているようにみえた。しかし、対象パティシエの業務スキルや探求の様子、主観的体験を分析してみると、このスランプの経過では本人の業務に対する社会的視点の質的变化が生じていることが確認された。

発表当日は、この事例から職業的発達における初心者から一人前への移行がどう描き出せるかについて考察する。またこの事例検討が、技能の問題と個人の実践における体験や発達の問題のかかわりについて改めて議論する手がかりにもなればと考えている。

話題提供3：竹内一真（多摩大学グローバルスタディーズ学部）

近年、後継者不足の影響もあり各地で固有の伝統工芸の技能が失われている。一方で復活を遂げ、興隆を極めている技能も存在する。このように一度失われてしまい、教えを請う先達もいないなかで、なぜ受け継いだという意味づけることができるのであろうか。本発表ではこの技能の復活に焦点を絞り、一度断絶したにも関わらず、そこから復活をとげていく過程に注目した。

本発表では、鹿児島、萩、仙台の三つの地域におけるガラス工芸を対象として、現代社会における技芸の復活プロセスを明らかにした。ガラス工芸を復活させた実践者に対してライフストーリーインタビューを行い、ガラス工芸の習熟過程、各地域のガラス工芸の復活過程、新たな製品の制作過程という三つの過程に関して話を聞いた。

その結果、2つの点が明らかになった。一つ目が物語を単純に復活の際の源として利用するという黒子としての機能だけでなく、物語自身を商品の一部として利用する「商品としての物語利用」という点である。二つ目が「自身の経験の物語への組み込み」という点で、復活を行う際に技術者自身のキャリアで築き上げてきた経験を途絶えた物語に組み込むことで創発を産むという点である。

これら二点を通じて、過去に廃れてしまったような技芸であったとしても現在に価値あるものとして蘇られせることを可能にしているのである。

知識偏重社会への警鐘

ー「知らない」のパフォーマンスが未来を創るー

企画：石田喜美（横浜国立大学教育学部）

司会：岸磨貴子（明治学院大学国際日本学部）

話題提供：茂呂雄二（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

佐伯胖（田園調布大学人間科学部）

パネルトーク：太田礼穂（青山学院大学社会情報学部）・新原将義（帝京大学高等教育開発センター）・渡辺貴裕（東京学芸大学教職大学院）・山口悦子（大阪市立大学医学部附属病院）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

企画趣旨

本シンポジウムでは、ロイス・ホルツマン『「知らない」のパフォーマンスが未来を創る—知識偏重社会への警鐘』におけるメインピックのひとつである、「知らない」ことの潜在力/可能性（**Unknowability**）に焦点を当て、未知の社会に生きる我々にとっての研究や知のありかたを問い直すことをねらいとする。

我々人間全体にとって「未知」なウイルスの登場は、私たちに、「知ること」に拘泥することの愚かさ／「知らない」ことのパフォーマンスによってしか切り開かれなければならない未来の存在を感じさせる。本大会のテーマ「はなれる～社会的距離の中での親密性」は、まさに、「知らない」世界のなかでの我々の関係性のありかた、コミュニティのありかた、そしてそのような関係やコミュニティに対する知のありかた、研究のありかたを問うものであろう。本書では、教育学や心理学、科学（サイエンス）の世界において、「知ること」の拘泥が招いた不幸な結果についてひもとくとともに、ヴィゴツキーとヴァイトゲンシュタインとの対話を通じて、「知らない」ことのパフォーマンスが持つ可能性を導き出されている。本書での議論は、我々が、今後向かうべき研究や知のありかたを議論するうえでの出発点となりうる。

本書の著書であるロイス・ホルツマンは、ニューヨークにあるイーストサイド研究所（East Side Institute）所長である。ホルツマンは日本質的心理学会第9回大会（2012年9月に開催）において「ヴィゴツキー派ソーシャルセラピーの方法とマルクス」と題した講演を行なっている（抄録集, pp.16-17, <http://www.jaqp.jp/conf/JAQP09.pdf>）。

その後、2014年9月のホルツマン『遊ぶヴィゴツキー』（茂呂雄二訳、新曜社）発刊を皮切りに、2016年にはその思想の実践編ともいえる、キャリー・ロブマン（ラトガース大学・准教授）ほか『インプロをすべての教室へ』（ジャパン・オールスターズ訳、新

曜社)、キャシー・サリット(パフォーマンス・オブ・ア・ライフタイム (POAL)社名誉 CEO 兼共同設立者)『パフォーマンス・ブレイクスルー』(門脇弘典訳、徳間書店)が、2019年には「ソーシャルセラピー」の理論=実践のガイドラインであるフレド・ニューマンほか『みんなの発達!』(茂呂雄二ほか訳、新曜社)が発刊されている。また同じく2019年には、これらホルツマンらによる「パフォーマンス心理学(performatory psychology)」の理論や実践における日本における可能性を探った『パフォーマンス心理学入門』(新曜社)も発刊されている。

理論と実践を巻き込んだこの潮流は、今年、ロイス・ホルツマンの著書2冊の邦訳——『革命のヴィゴツキー』(伊藤崇・川俣智路訳、新曜社)、そして『知識偏重社会への警鐘』——の発刊によって、さらに新たなステージを迎えようとしている。

本学会での講演から8年、日本でもホルツマンの理論を中心とした新たな理論=実践が展開されている。日々、「未知」な状況に立ち合い続ける現在という状況の中、「知らない」世界での知や研究のありかたを求められる中、あらためて、質的心理学研究におけるその理論=実践の可能性を探りたい。

(なお、本シンポジウムは、日本認知科学会教育環境のデザイン分科会(DEE)との共催で行われるものである。)

話題提供

まず「話題提供」として、茂呂雄二氏(筑波大学)、佐伯胖氏(田園調布大学)のお二人が、それぞれの立場から、『知識偏重社会への警鐘』において展開されている議論が質的心理学にもたらす示唆についてコメントを行う。

茂呂雄二氏は、本書の編訳者のひとりでもあり、2012年に開催された本学会大会での講演にホルツマンを招聘した人物である。また茂呂氏は、本書のみならず、『遊ぶヴィゴツキー』をはじめ、パフォーマンス心理学関連の訳書の刊行に精力的に関わり続けてきた。まさにホルツマンを中心としたパフォーマンス心理学の知見を日本に紹介してきた人物とともにとって、本書はどのような意味を持つものかについてコメントをいただく。

佐伯胖氏は、ジーン・レイブ&エティエンヌ・ウェンガー(1993)『状況に埋め込まれた学習』(佐伯胖訳、産業図書)などを通じて、日本における状況的学習論の普及と展開に、非常に重要な役割を果たした人物である。本書にもホルツマンがLCHCに所属していたことが自身のライフヒストリーとして記載されているが、ホルツマンの議論は、状況的学習論の議論の延長線上にあり、またそれを超えゆくものとして位置付けうるものであると考えられる。そのようなホルツマン氏の議論を、佐伯氏がいかに読み受け止めたのか、についてコメントをいただきたい。

パネルトーク

以上の「話題提供」を受け、「パネルトーク」として、本書の翻訳にもかかわった領域横断的——教育、心理、医療等——の研究者に加え、サトウタツヤ氏もゲストとしてお呼びし、心理学的な意義も加えて議論の可能性を模索する。

イマジネーション理論がひろげる「発生の三層モデル」 の可能性

企画・司会・話題提供：小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）

企画・話題提供：上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

企画・話題提供：宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）

話題提供：鈴木美枝子（いわき短期大学幼児教育科）

指定討論：木戸彩恵（関西大学文学部）

企画趣旨

発生の三層モデル（TLMG）は、複線径路等至性モデリング（TEM）、歴史的構造化ご招待とともに複線径路等至性アプローチ（TEA）を構成する要素の一つである。TLMGは、非可逆的時間の流れの中にあるライフ（生命・生活・人生）の変容の分岐点に焦点をあて、そこで発生する「人間の内的な変容過程を、文化的な促進的記号と信念・価値観との関係でとらえ理解するための理論」（能智他,2018, p.249）であり、近年、この理論を考察に取り入れた TEA 研究も増えてきた（安田・サトウ,2017）。TLMG では、個々の活動や行為が発生する個別活動のレベル（第1層）、状況を意味づける記号が発生する記号のレベル（第2層）、信念・価値観が維持・変容するレベル（第3層）という3つの層を想定し、その「3つの層間情報の内在化・外在化のプロセスにより、行動と価値・信念の様相を促進的記号の絡みあい」（安田他,2015b, p.34）によってとらえようとする。

一方、イマジネーション理論において、イマジネーションとは「直接的設定」を抜け出して、過去や未来、現在において可能なことや不可能なことも探索することを可能にする経験を作り出すプロセス」（Zittoun & Gillespie, 2016, p. 2）であると定義されている。イマジネーションを「経験（から）の分離によって始まり、大抵の場合、（経験への）再結合という結末になる」（同 p. 40）という円環的な過程としてとらえ、イマジネーションが展開するきっかけ（trigger）、リソース、結果という側面から検討し、さらに、時間的志向性・一般化可能性・実現不可能性の3次元の中で図示化するループモデルが提示されている。

本企画では、イマジネーション理論を活用して考察することが TLMG による分析をいかに深めるかを議論する。話題提供1は TLMG による分析の利点と困難点を、話題提供2~4は TLMG にイマジネーション理論を活用して得られる示唆を、それぞれ事例に

基づき報告する。最後に、指定討論者が提示する論点を踏まえ、イマジネーション理論が TLMG 理論にもたらす可能性と今後の検討課題についてフロアを交えて議論したい。

話題提供 1：「震災時、保育者の二重性による葛藤を TLMG で描く」鈴木美枝子（いわき短期大学幼児教育科）

東日本大震災時に、特に放射能の影響により、地域住民・保育所に通っている家族が避難をする中で、地域に残って保育者としての仕事を続ける選択をした保育者の葛藤を、TLMG を用いて分析した事例に基づき、TLMG による分析の利点と困難点を指摘する。

話題提供 2：「COVID-19 感染拡大の中で経験された転機におけるイマジネーションの働き」小澤伊久美（国際基督教大学）

COVID-19 を経験する大学教員のライフにおいて分岐点となった転機を取り上げ、そこで展開されたイマジネーションをループモデルによって分析する。社会的につくられるイマジネーションの個人的で独創的な過程（安田他 2015a）を明らかにすることが、TLMG による分析にいかに関与し得るかを考察する。

話題提供 3：「『共食』における個人の行為と文化・価値観を考える」上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

TEM を用いて「共食」を通じた個人の行為における社会的な意味とアイデンティティについて考察する中でイマジネーションと TLMG を用いて個人のもつ意識や価値観をどのように分析できるかを考える。

話題提供 4：「キャリアの分岐ゾーンにおけるイマジネーション——記号論的観点から」宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）

能動的キャリア期から自立的キャリア期への移行期の分岐ゾーンにおける、トリガーを起点としたイマジネーションループのありようを、TLMG を用いて記号論的観点から考察する。

指定討論：木戸彩恵（関西大学文学部）

4 名の発表を承けて、TEA を拡張するためのイマジネーション理論の活用について言及する。その上で、現象理解を目指す理論の融合について皆さんとともに考えたい。

引用文献

能智正博他編（2018）『質的心理学辞典』新曜社

安田裕子・サトウタツヤ編著（2018）『TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する』誠信書房

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編（2015a）『ワードマップ TEA 理論編——複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編（2015b）『ワードマップ TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する』新曜社

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2016). *Imagination in Human and Cultural Development* London: Routledge.

静と動のビジュアル・ナラティヴ

企画：家島明彦（大阪大学キャリアセンター）
やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）
司会：神崎真実（立命館大学グローバル・イノベーション研究機構）
話題提供：やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）
土元哲平（立命館大学グローバル・イノベーション研究機構）
鈴木 栄（東京女子大学現代教養学部）
張 暁紅（熊本大学教授システム学研究センター）
指定討論：浦田 悠（大阪大学全学教育推進機構）
家島明彦（大阪大学キャリアセンター）

企画趣旨

ビジュアル・ナラティヴとは、視覚イメージによるもの語りであり、狭義のことばの概念を変革する（やまだ, 2018）。企画者らは数年来ビジュアル・ナラティヴの理論考察と方法論の検討を重ねてきた。その結果、「関係性の変革」「時間概念の変革」「身体概念の変革」「自己とアイデンティティ概念の変革」「情報処理の変革」「コミュニケーションの変革」などのビジュアル・ナラティヴの革新性が明らかとなってきた。

本シンポジウムでは「静と動のビジュアル・ナラティヴ」と題してビジュアル・ナラティヴにおける「静」と「動」の関係性に焦点を当てる。ビジュアル・ナラティヴには、静止画も動画も含まれる。古来より「静」と「動」は一見対極的に見えて実は表裏一体であると説かれることもある。静がなければ動もなく、また同じく、動がなければ静もない。では、ビジュアル・ナラティヴにおける「静」と「動」の関係をどのように考えたらよいのだろうか。話題提供、指定討論、全体討論を通して考えてみたい。

話題提供 1：やまだようこ（立命館大学 OIC 総合研究機構）

「はなれることの意味—動的アクションと離見の見」

「はなれる」ことはマイナスのようにみえる。しかし、語りの宛先や語りコミュニティにおいて、家族など身近な人より、見知らぬ人に SNS など打ち明け話するのはなぜだろう？授業で使うビジュアル・ナラティヴの媒体も、静止画より動画、さらには即時的に対話できる双方向デバイスで、リアルな現実によく近づける方が優れているのだろうか？

「はなれる」ことの意味を、「静観的認識」「文脈を切る」「離見の見」などの概念によって、問い返してみたい。芸術も双方向的になり、制作者と観客の境界をなくし、その場のインタラクションによって即座に経験を生成する傾向が強くなってきた。世阿弥は「5位（妙、感、意、見、声）」において「即心・即座・即目」から気を転じると「離見

の見」感が生まれるという。静かにじっと丁寧に眺め深く耳をすませて考えてみよう。

話題提供 2：土元哲平（立命館大学グローバル・イノベーション研究機構）

「メタファーの理解過程における静と動のビジュアル・ナラティブ」

メタファーとは、あるもの A を別のあるもの B で(暗に)喩える言語表現である。ペッパー (1990) によれば、メタファーは「ある経験を照らし出すために—たとえば、それを理解したり会得したり、さらにはそれを直観したり、共感したりするのを助けるために—別の経験の一部を利用」(Pepper, 1990, 邦訳, p.407) する機能を持つ。発表者は、オートエスノグラフィーの一環として、キャリアの転機を促す他者との関係性（よいキャリア支援）を、「卓球ラリー」のメタファーで表現した（土元・小田・サトウ, 2020）。この成果から発表者は、メタファーは「静」的なものであるが、語り手のナラティブが触媒となることで、聞き手に「動」的なイメージを効果的に伝達・喚起できると考えている。このような観点からメタファーとビジュアル・ナラティブとの関係について話題提供を行いたい。

話題提供 3：鈴木栄（東京女子大学現代教養学部）

「学習者のナラティブは表現方法によってどのように異なるか」

学習者が持つビリーフは、学習方略や動機付けに影響を与えるとして外国語教育研究で注目されてきた。ビリーフを探る方法として質問紙に加え、絵、写真、ビデオ、コラージュなどをビジュアル・ナラティブとして使う研究が注目されている（Kalaja & Dafva, 2013; Suzuki & Childs, 2016）。ビリーフは経験の上に構築されるものであり、経験を伝えるナラティブは重要なデータになる。頭の中でイメージとして描くナラティブは、動であるが、それを表現するときには、静になる。データは常にいくつかの声を持ち、異なる方法を使うことで解釈に広がりがある。また、複数のデータを使うことで研究対象の全体像が見えるとも考えられる。表現方法で学習者のナラティブは変わるのか、ビジュアル・データにはどのような可能性があるのか、学習者研究におけるビジュアル・データの可能性について議論したい。

話題提供 4：張曉紅（熊本大学教授システム学研究センター）

「大学生のビジュアル成果物による創造的思考の分析」

創造力とは、斬新かつ応用可能なアイデアを生成、そして表現する能力である（Hokanson, 2018）。創造性は、学習者の発想を絵や色などで自由に表現する創造的視覚化という活動により高めることが可能である（楠見・道田, 2015）。しかし、創造的視覚化活動において、学習者のそれぞれの発想に基づいて作成された成果物をどのような観点から評価することが適切か、ということについては議論の余地がある。本研究は、ビジュアル・ナラティブの静と動、離れとつなぎの観点から、大学生の創造的視覚化活動の成果物を分析し、同観点から創造力を評価する可能性を探る。具体的には、ある大学のメディアリテラシーの授業で取り上げられた「未来の家」をテーマとし、大学生が作成した 58 枚の成果物を分析対象とする。

口 頭 発 表

高校生女子がインターネット上で知り合った他者と親密になるプロセス

佐藤奈月（北海道大学大学院教育学院）・加藤弘通（北海道大学教育学研究科）

現代の若者は、デジタルネイティブと言われる一方でネット依存といった問題が取り上げられ、ネット上で他者と知り合うことについても若い女性の「問題」として研究が行われてきた。しかしその一方で、当事者の視点からの研究は非常に少ない。そこで本研究は、高校生女子を対象にネット上で知り合った他者と親密になる過程を明らかにすることを目的とした。ネット上で見知らぬ他者と知り合ったことがある高校生女子6名に半構造化面接を行った結果、多くの人と知り合う【種まき】と、リスクを感じる人との関係を切る【間引き】によって親しくなる他者を選び、対面で知り合う他者と同じくらい親しいが質的に異なる親密さになることが明らかになった。また男性をモデルとした発達観によって、「人間の結びつきのネットワークの中に自分自身を組み入れていく」女性の発達が問題として捉えられ、女性かつ子どもであるという二重のマイノリティであることで主体性を奪われている可能性について考察した。

オートエスノグラフィーの方法論と文化心理学

土元哲平（立命館グローバル・イノベーション研究機構）

オートエスノグラフィー(AE)は1970年代に提唱され、2000年以降、様々な方法論が花開いてきた。しかしながら、その方法論に関する体系的整理や、心理学との関係についてはほとんど議論されていない。そこで本研究では、1) AEの歴史的展開をレビューし方法論的志向の特徴を整理すること、それによって2) 心理学(特に文化心理学)との接点を探ること、を目的としたレビュー研究を行った。AEの方法論的志向を整理する枠組みとして「研究関心」(個人-文化)と「視点」(主観的-相互主観的)という二次元を設定し、各象限を「自叙伝的AE」「相互行為的AE」「エスノグラフィー的AE」「熟慮的AE」と設定した。最後に、「相互行為的AE」における、研究者の視点の相対化による心理的現象を組織化する過程の理解と、「熟慮的AE」における経験の創出過程における文脈の精緻な記述が文化心理学との接点であり、これらの志向における方法論的課題であることを指摘した。

自粛生活中的集合的オートエスノグラフィの試み

宮前良平（大阪大学大学院人間科学研究科）

本発表では、新型コロナウイルス感染拡大防止のために入学後ほとんど登校することなく自粛生活を強いられることになった大学新入生の生活記録を「集合的オートエスノグラフィ」と見なし議論する。本発表で題材となる生活記録は、発表者が大学1年生向けの授業「エスノグラフィを書く」で課した課題がもとになっている。課題は3回に分けて書かれた(5月6日、5月27日、7月15日)。以上の3回の締め切りに従って、学生たちは自らのオートエスノグラフィに加筆を

施していった。書かれた内容としては、マスクの着用によって対人関係が阻害されること、リモート授業の徹底による学び観の変容など多種にわたる。また、生活記録を加筆していくにしたがって本文中の「人称」が変化していく作品もあった。本発表では、内容あるいはその変遷の分析を通して、「自分について書くこと」の方法論的意義や教育的効果について論じていきたい。

大学生が主体的に学習しないのはなぜか—ナラティブから解き明かす講義に対する意識

萩原ちはる（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

現在の大学教育では「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材」（文部科学省，2012）の育成を目指している。一方、大学生の半数以上は興味のある学問分野を重視しているものの受動的な学習観を抱いている（ベネッセ教育総合研究所，2016）。本研究は大学生が主体的に学習しない理由を明らかにするために学生の講義に対するナラティブモード（野村，2009）に着目し、学生の視点から講義に対する意味づけを共感的に把握することを試みた。研究倫理に配慮した上で大学生3人が講義に対し生成する語りを調査した結果、学生が主体的に学習しないのは学生の意識と講義内容に乖離が生じることで自己の文脈に即した語りを生成できないからであると判明した。一方、教員の意図に限らず講義内容を自己と結びつけて意味づけできたとき、学生は主体的に学習を解釈し、語りを生成した。ここから、大学生の意識に寄り添えるよう講義をデザインする必要性が示唆された。

ヴィジュアル・ナラティヴを用いたフォークペダゴジーの探究

横山草介（東京都市大学人間科学部）

教育や保育の担い手が当の実践に際して保持している実践についての信念や価値の体系を Bruner（1996）は「フォークペダゴジー（folk pedagogy）」という概念で説明した。本研究の目的はこのフォークペダゴジーを「ヴィジュアル・ナラティヴ」（やまだ，1988，2018）の方法論を用いて明らかにすることにある。ヴィジュアル・ナラティヴは言語至上主義的なナラティヴ研究の動静に対し、視覚的な媒体を研究方法のうちに取り込むことによってナラティヴ研究の視野の拡張を目論むものである。本研究ではこの着想の土台に Bruner（1966，1996）の提起した人間が経験を表象するための3つの様式——動作的表象（enactive representation）、図像的表象（iconic representation）、言語・記号的表象（symbolic representation）——の議論を遡及的に位置づけることによって議論を展開する。

サードプレイスとしての地域日本語教室のこれから—オンライン開催に伴う変化と課題—

横溝環（茨城大学）

本発表では、With コロナに伴い地域日本語教室を対面からオンライン開催に変更したことで、本教室がサードプレイスとしてどのように変化したのかについてアクションリサーチをもとに報告する。顕著な変化として、参加者の目的・役割の明確化、人・目的つながりで地域を超えて参加するメンバーの増加、学習ペア／グループの固定化、ペア／グループ間の横繋ぎの希薄化（タコソボ化）、人の存在そのものではなく知識・技術への価値の偏重が挙げられる。結果、対面時よりも日本語を学習する空間としての機能は高まったが、その場にいるだけで享受することのできた癒し・憩い等の要素は薄れたと言える。これらは、0 か 1 かのデジタルの特徴そのものを反映した結果であると考えられる。地域日本語教室ひいては多文化共生社会は皆で創っていくものであるが、ホストのコントロールが色濃く反映されてしまうデジタル空間と今後どのように関わり、活動をどのように展開していくか検討を重ねていきたい。

学習者の評価意識と学び —「よいレポート」をめざすプロセス—

佐野香織（長崎国際大学人間社会学部）・木野緑（早稲田大学日本語教育研究センター）・チヨナレ（早稲田大学日本語教育研究センター）・室田真由見（東京医科歯科大学統合国際機構）・山方純子（早稲田大学日本語教育研究センター）

本研究は、参加型評価の試みに取り組む教員のレポート授業実践を通して、学習者の評価に対する意識を分析し、その学びを考察することを目的とするものである。対象は、2019 年春学期（4 月-7 月）、私立 A 大学の総合科目群中上級レベル学習者対象のクラス（90 分週 3 コマ）で行ったレポート執筆授業実践である。春学期終了後、当該コース履修生を対象に、レポート授業、レポ

ートの評価に関する質問紙調査およびインタビュー調査を行った。統計分析、質的分析を行った結果、学習者の評価意識は評価対象や評価方式により異なることが分かった。また、ルーブリックを活用した形式評価と、「よいレポート」をめざした内容評価項目の作成、クラスメート、教員と共にレポートについて考えていくという一連の参加型評価プロセスそのものが学びとなっていることが示唆された。

学習体験の振り返り活動における相互行為分析

竹田琢（青山学院大学社会情報学研究科）

価値観が多様化した現代社会の中で、他者と関わり合いながら自律的に生き、学び続ける力として、ふりかえり (reflection) という概念が注目されている。国際機関レベルでみると OECD (2005) が初等・中等教育におけるキー・コンピテンシー (key competencies) の中心にリフレクティブネス (reflectiveness) を挙げている。日本でも、2017 年に公示された新学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」の重要な要素として「学習活動を自らふりかえり、意味付けを行うこと」を位置付けている。振り返りという活動は、グループ全体により社会的・公的に達成されている（福島、2016）が、その相互行為に着目した研究はほとんど見当たらない。そこで本研究では、グループにおいて行われる振り返り活動を対象に、どのように振り返り活動が実践されているのかについて、ディスコース分析の視点から検討する。

「媒介の専門家」を媒介にしてアクションリサーチについて考える

矢守克也（京都大学防災研究所）

本発表では、八木絵香（著）『続・対話の場をデザインする』（大阪大学出版会、2019 年刊）にキーワードして登場する「媒介の専門家」という概念を媒介にしたアクションリサーチ論を提示する。同書は、JR 尼崎列車脱線事故によって負傷した人びとやその家族が結成した「空色の会」を舞台としている。「空色の会」のメンバーは、事故の犠牲者やその家族（遺族）、加害企業の関係者、事故の検証に携わる人たちなどとの間で、数多くの「線引き」を経験する。「線引き」は、その出来事のコアな当事者からまったく無関係と思える人たちへという「中心一周辺軸」に沿って生じるのがふつうである。しかし、「線引き」には、微細な違いこそ大切だという意味できわめて頑強な一面と、一見はるか遠くに隔たっている人たち同士、つまり何重もの「線引き」の彼方に位置すると思われる人たち同士が容易に反転・互換してしまうという意味で、きわめて柔軟な一面とが同居している。本発表では、「媒介の専門家」とは、「線引き」がもつこの両義的な性質を活用して、当事者と「共にことをなす」アクションリサーチャーに他ならないことを指摘する。

横浜市都筑リビングラボのデザイン

松藤遥香（東京都市大学大学院環境情報学専攻）・伊藤悠（東京都市大学メディア情報学部）・片野紗恵（東京都市大学メディア情報学部）・小池星多（東京都市大学教授）

近年、人口減少や高齢化により地域の力や行政サービスが低下していることに対して、「リビングラボ」のような地域において各ステークホルダーが集まったコミュニティにより問題解決が行われている。横浜市都筑区では、精神的困難をかかえる当事者、東山田準工業地帯の中小企業、NPO 団体、行政、大学がステークホルダーである「都筑リビングラボ」で活動しており、当事者の新しい働き方を検討している。本研究では、都筑リビングラボの各ステークホルダーの関係性がどのように変容するか観察し、考察を行った。その結果以下のことがわかった。

- (1) 各ステークホルダーは同等な立場でリソースを提供することでフラットな関係を持ち続けている。
- (2) 各ステークホルダーが対等な関係にあり、当事者にとって居心地の良い場所となっている。
- (3) 各ステークホルダーは一つの目標に向かっているが、各ステークホルダーはすれ違った思惑を持っている。

災害発生後の社会の「空気感」の変化予測に関する調査についての考察

松原悠（京都大学大学院情報学研究科）・矢守克也（京都大学防災研究所）

大規模災害が発生した際には、TVCM の自粛や「災害ユートピア」の議論にみられるように、社会に独特の「空気感」が発生し、時間経過に伴って徐々に平常時の「空気感」が取り戻されていく

ことが知られている。現在想定されている南海トラフ地震発生時におけるこの変化を予測すべく、愛知県在住者 750 名を対象に調査を実施した。調査票では、一つの仮想的な災害シナリオを提示したうえで、32 項目の社会活動に対していつ頃からならそれが許される「空気感」になると思うかを問うた。さらに、個人としては許されると思うが世間がそれを許さないだろうと思う場合は「許されない」として回答するよう依頼した。結果、回答者の職業や性別等によって回答傾向に違いがあることがわかったが、本発表では、調査データや事前のプレ調査で寄せられたコメントをもとに、回答者による調査票の解釈の多様性や、それが調査結果に与えた影響等について分析し考察する。

家族の形成過程と将来展望 ―女性の語りから浮かび上がる妊娠の計画性／偶発性―

三品拓人（大阪大学大学院人間科学研究科）・妹尾麻美（同志社大学文化情報学部）・安田裕子（立命館大学総合心理学部）

本報告では、妊娠期の女性へのインタビューデータをもとに「どのように妊娠に至り、その過程でどのようなことを考えていたか」を検討した結果を提示する。学卒後の人生の語りの中で、分析では特に妊娠にいたる過程や契機、計画や展望に焦点を当てた。その結果、女性自身や夫の定位家族の状況を想起することに加え、経済状況や持ち家の計画、職場復帰、子どもの受験、子育ての大変さ、などを念頭に置き、妊娠時期や出生する子どもの数を考慮・希望していたことが明らかになった。

以上のように、妊娠・出産には高度で複雑な計画性（場合によっては、月単位でのコントロール）が存在する一方、人によっては身体に付随する偶発性（意図していない時期の妊娠や不妊治療）と隣り合わせでもあり、妊娠・出産に至る過程の多層性および計画性と偶発性がせめぎ合う様相が浮かび上がった。調査は立命館大学研究倫理委員会の承諾を受けています（衣笠_人_2017_5。）

トランスジェンダー当事者における「コミュニティ」の意味―学校や当事者コミュニティに関する語りに着目して―

有島みなみ（奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科）

トランスジェンダー（以下、TG）とは、割り当てられた性別とは異なる性別に帰属する人のことを指す。TG には、男性および女性にのみ同一感をもつ人や、男性と女性両方に同一感をもつ人、いずれにも同一感を持たない人がいる（佐々木，2017）。TG 当事者は、身体的性と性自認との差異により、現実・社会の中で自身の性の自覚をはっきりさせなければという意識が高まり、性における自己同一性の感覚が明確になっていることが指摘されている（谷，2008）。他方、学校生活の中で TG 当事者が、自らがいたい性とは異なる性別の人間関係の中に自分を投じなければならない状況に置かれる場合があることが指摘されている（土肥，2015）。本研究では、TG 当事者にインタビュー調査を行い、語りから「コミュニティと出会う」ことや「自分を定義する概念と出会う」ことの重要性が浮かび上がってきた。本研究では、TG 当事者が「コミュニティ」をどのように捉えているのかを中心に分析を行った。

口頭発表 1D 10/24 9:00-10:45 Zoom Room D

「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程—自己エスノグラフィと複線経路等至性アプローチによる検討

勝谷紀子（北陸学院大学人間総合学部）

病気や怪我などさまざまな原因で難聴になることで数々の困難に直面する（難聴者の心理学的問題を考える会，2020）。本研究では、Auditory Neuropathy（AN；加我，2011）という難聴を引き起こす疾患を持つ発表者自身の体験を対象として「聞こえにくさをかかえて生きる」体験の変容過程について自己エスノグラフィ（沖潮（原田），2019）とTEA（安田，2019）から検討する。方法としては、聞こえの問題が判明し、ANと最終診断を受けて現在にいたるまでの体験を自己エスノグラフィとしてまとめ、その記述に現れたエピソードを時系列に並べていき、鍵となるエピソードを抽出してTEM図を作成した。その結果、体験の過程を整理すると、①問題が表面化しない時期、②少しずつ表面化してきた時期、③本格的に問題が表面化した時期、④「中途半端な対処」期、⑤難聴に直面せざるを得なくなる時期、⑥「障害者」になる時期、⑦「聞こえにくさとともに生きている」時期に整理することができた。

複線経路・等至性アプローチ（TEA）を用いた教師のバーンアウトに関する質的研究 —特別支援学級の担任教師に着目して—

小沼豊（北海道教育大学大学院教育学研究科）

本研究は、はじめて特別支援学級の担任を経験し、バーンアウトから休職を選択した1名にインタビューを行い、意識はどう変容するのか、教師への支援のあり方について、複線経路・等至性アプローチ（TEA）を用いて明らかにする。個人の経路の深みを探るため1名を対象とした。その結果、(1) <子どもからの抵抗感>、(2) <子ども理解・支援計画を立てる>、(3) <学校行事と校務分掌に追われる>、(4) <評価のための資料収集>という分岐点を経験した。特に(4) <評価のための資料収集>では、評価方法の変更に関して、保護者の理解が得られず、<保護者との協力に不安がある>から連絡事項ややり取りに支障が生じた。保護者対応のストレス、子どもからの暴力に対する無力感が蓄積し、休職に至るまでの選択が明らかになった。本研究では、特別支援教育に経験がない場合には、見通しや専門的見立ての援助を受けられるような体制の重要性が示唆された。

複線経路等至性アプローチ（TEA）を用いた日本人大学生の宗教意識発達プロセスに関する研究 筑波義信（立命館大学大学院人間科学研究科）

日本人の多くは自分自身の宗教態度を「無宗教である」と認識している。しかし、日常生活では様々な宗教文化を受容しており、神秘的なものを一切認めない「無神論者」とであるとは言い難い。本研究では大学生を対象とし、予備調査として既存尺度を用いた宗教態度・宗教観に関する質問

紙調査を行った。結果、「特定の信仰を持たず、宗教に関心もない」という宗教態度を持つ層が多数派であり、先行研究の結果と相違ないことが確認された。また、「特定の信仰を持たず、宗教に関心もない」という宗教意識を持つ大学生2名を対象にインタビュー調査を行い、複線径路等至性アプローチ（TEA）による分析を行った。その結果、大学生の宗教意識発達、アイデンティティの形成過程において近親者の喪失体験や人間関係から影響を受けること、宗教行動と宗教意識は相互に影響を与え合っていることなどが示唆された。

災害から生活復興に向かうプロセスの多様性 ―複線径路等至性モデルを用いた東日本大震災の高齢者の事例分析―

河本尋子（常葉大学社会環境学部）

本研究では、東日本大震災を事例に、災害の被害から生活復興に向かうプロセスに着目した。震災で在宅避難を経験した高齢被災者を対象としたインタビューのテキストデータから、彼らの生活復興に向かう径路の多様性を表現することを目的とした。研究の背景に、災害事例では高齢者の被害が大きいこと、将来の災害では在宅避難のケース増加が予測されること等が挙げられる。特に高齢被災者は災害後の生活立て直しに長時間を要するなど、困難が伴うケースが多い。本研究では、複線径路等至性モデルを採用した分析により、対象ケースの生活復興に向かうプロセスの描画をおこなった。その結果、住宅の所有状況や、家族・親族・近隣との関係、世帯員の健康状態、支援団体とのかかわりの有無等によって、異なる分岐を経てさまざまな径路をとっていたことが可視化された。なお本研究は、倫理的配慮として、常葉大学研究倫理委員会の承認を得て実施したものである。

対話的な自己エスノグラフィにおける「気づき」 ―兄を小児がんで亡くした妹の語りから―

若子静保（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース修士課程）・沖潮満里子（湘北短期大学生生活プロデュース学科）

本研究は、兄を小児がんで亡くした第一著者（以下〈わたし〉）のありように迫るために行った対話的な自己エスノグラフィである。その中でも、本発表では、対話の繰り返しの中で当初意図していなかった研究テーマがどのように浮かび上がってきたのかに注目した。その結果、兄中心の人生を生きていた〈わたし〉は、自らがきょうだいであることで自分の人生を生きてよいのだと気づき救われた。しかし、対話を繰り返し、対話者の反応に伴って生起される思いや語りの意図をも含めて分析する中で、〈わたし〉は、きょうだいであることをうまくいかないときの逃げ道として使い、きょうだいであることに囚われているのではないかと気づき、激しく動揺した。同時に、自分を差し置いて親に寄り添い、兄を思って生きていきたいという思いも存在し、葛藤していることが明らかとなった。ここで、〈わたし〉を救い、きょうだいである自分を中心として生きることを可能にしたオルタナティブ・ストーリーは、いつの間にかドミナント・ストーリーとして作用していたと考えられた。

事務系職種における視覚障害者の就労スキル発達過程：全盲／弱視モデル

竹下浩（筑波技術大学保健科学部）

近年、伝統的「三療」職域の視覚障害者優位性が減少する一方、PC等の進歩により事務職での採用が期待されている。雇用促進とキャリア開発には就労スキル習得と支援メカニズムの解明が急務だが、未解明のままである。そこで、視覚障害者（全盲者7名・弱視者8名）から収集した質的データをM-GTAで分析、説明・予測モデルを生成した。結果、全盲モデルでは9カテゴリー・29概念、弱視モデルでは6カテゴリー・19概念が生成された。当事者が自覚する困難さは全盲モデルが技術・対人・概念的スキルであったのに比べ弱視モデルは技術的スキルが殆どであり、養教育課程における訓練機会の差と入社後訓練の必要性が示唆された。上司との関係性は全盲モデルが配慮者・分割者・スキル開発者、弱視モデルは晴眼者基準の全適用・仕事の特定制・対話による仕事開発であった。弱視モデルで健常者扱いを好む場合、晴眼者基準による低評価等で発生するストレスへのケアが必要となる。

子育てを介さない中で経験された母親としてのライフヒストリー：親であることの意味の再検討

濤岡優（北海道大学大学院教育学院）

親であるという認識、親としての自己のあり方はどのようにして形成されるのか。先行研究では、親であること／親になる過程は、子育てによって生じる子との具体的な関わりや親密な結びつきによって説明されてきた。しかし、何らかの事情により、子と物理的に離れざるを得ないとき、親であることはどのように経験され、何が親であり続けることを可能にしているのか。本研究は、このような問いを、ある女性の母親としてのライフヒストリーから検討する。本研究で協力を依頼した女性は、夫婦関係の問題が原因で、子が幼いときに家を出た経験をもつ80代の女性である。彼女は、周りから「捨て子同然の行為」をしていると言われながらも、自分を守るため家族と離れることを選んだ。しかし、彼女は離れている中でも子を心配し子の成長を願った母親としての経験を語った。本発表では、このような彼女の経験から、子育てという具体的な相互行為を超えて経験される、母親であるということの根源的な意味に迫る。

困難を抱える女性に対応したメンタルヘルス支援～社会モデルの視点から～

鴨澤小織（日本大学文理学部）

世界保健機構（WHO）が目指す「健康」には精神的に満たされた状態（mental well-being）が不可欠であり、保健医療と社会的支援の両方をライフコース全段階において考慮した総合的なメンタルヘルス支援の重要性が増している。日本では、気分障害（躁うつを含む）として医療機関で治療を受けた人数は女性が男性と比べて全世代で多い。一方、様々な理由から困難を抱えた女性への公的な社会支援は、売春防止法とDV法を根拠とし、支援ニーズに対応できていないと言

難く、民間の支援に頼っている。平成 30 年に厚生労働省が「困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」を開催、婦人保護事業のあり方の見直しをしており、実態にあった社会支援が模索されている。本研究は困難な状態に陥った女性たちがどのような支援を求めているのか、また援助希求行動について、当事者への質的インタビューを通し明らかにして、女性福祉の視点から社会モデルの支援を見直したい。

当事者研究の枠組みを用いた夫婦間の対話促進の試みー「夫婦研究」におけるコミュニケーション・パターンの検討

北村篤司（昭和音楽大学短期大学部）・北村つかさ（行政職相談員）

夫婦関係においては多様な問題や葛藤が生じるが、その対処方法の一つとして「話し合い」が挙げられる（熊谷, 1979）。また、近年家族療法においては、バフチンの「対話」の概念に基づきコミュニケーションに焦点を当てた実践が行われてきており、そうした実践では、会話が「モノログ」から「ダイアログ」へと移行していくことが重視されている（Olson ほか, 2012）。夫婦の葛藤への対処として、話し合いを「対話的」に行うことは有用であると考えられるが、葛藤となる問題について話し合う際には、相手に対して攻撃的になる、自責的になるなど、対話を行う難しさも存在すると思われる。本研究では、当事者研究（浦川べてるの家, 2005）の考え方や枠組みを参照し、夫婦がそれぞれの問題について、“自分自身で、共に”研究するという実践（夫婦研究）を行い、夫婦間の対話を促進することを試みる。そこで生じたコミュニケーションのパターンを分析し、枠組みの意義や課題について検討する。

障害のある障害者就労支援員の語りから生成される〈知恵〉ーピアスタッフとの比較を手がかりにー

本間美穂（株式会社 LITALICO LITALICO ワークス事業部）

近年、ピアスタッフの実践や研究が蓄積されてきたが、障害のある専門的・職業的障害者支援従事者についての研究は未だ十分に蓄積されていない。当事者研究の知見から、ピアの関係において、経験への共感をもたらす「横の支援」だけでなく、知恵の伝承をもたらす「縦の支援」も重要だと指摘されてきた（e.g. 熊谷他「臨床心理学」増刊第 10 号, 2018）。そこで、本研究では、障害のある障害者支援員は支援の仕事をする中で感じる特有の強みと活かし方、困難さと対応策について一定の〈知恵〉を有するのではないかと仮説のもと、11 名の障害のある障害者就労支援員に対して半構造化面接を行い、そのデータを質的記述的に分析した。株式会社 LITALICO 倫理委員会の承認を得た上で研究参加者への説明と同意取得を行った。分析の結果、クライアント・同僚・企業に対する強みと活かし方が示され、障害者雇用一般に共通する困難さと障害者支援員特有の困難さが示された。ピアスタッフに関する言説との比較考察を行い、〈知恵〉の伝承と発展に向けた施策の検討も行った。

負の世代間伝達を断ち切った者のアイデンティティの変容過程 ——父母間葛藤に悩んだ2症例の分析——

江刺香奈（東京大学大学院教育学研究科）

親の不適切な養育や葛藤等が次世代で繰り返されることを負の世代間伝達という。本研究では、父母間葛藤の世代間伝達を断ち切ったと考えられる人々のアイデンティティやその形成過程を検討した。具体的には、子ども時代に父母間葛藤の仲裁役を行うも、自身の結婚後に同じ状況を繰り返していないとする当事者2名に半構造化インタビューを行い、原家族及び結婚後の状況と、その間のプロセスについて聴き取り、対話的自己論を利用し分析した。その結果、両名とも原家族では自身の行為主体性の弱さが表れていたが、現在はそれを強く発揮する夫、または子どものそれを守る親というアイデンティティを構築した様子が伺えた。またこの過程では、子どもや知人との関わりを通して自身を見つめ、抑えられていた自身の欲求を大事にする、かつてと異なるIポジションが見出された。このことから、自らの声に注目する行為と、良好な家族関係の維持とがつながりうることが示唆された。

成人ADHD者におけるレジリエンスのプロセス—複線径路・等至性モデル（TEM）による分析—

芝崎文子（東京大学大学院教育学研究科）

成人期のADHD当事者10名の語りを通じ、ADHD者のレジリエンスのプロセスを検討した。現在に至るまでの径路に類似性が見られる者で分類し、幼少期に外在化問題行動が目立つグループと、幼少期から人間関係に困難感を抱えているグループ、問題が徐々に顕在化していく3つのグループで、それぞれのTEM図を作成した。グループごとに特性の現れ方や径路は異なるが、就職やアルバイト経験といった就労段階で不適応状態に陥っている点において共通している。現状に適応できている者は、自身の特性と環境のマッチングが適切になされている状態にあった。不適応感を抱えている者からは、環境調整が困難であることや、社会的な理想を達成できていないことなどが語られた。今後のADHD者への支援は、自身の特性に合わせた環境選びのサポートや、適切な環境選びを行うための自己理解の促進、就労時以降の能力の補助に焦点を当てる必要性が示唆された。

オンラインPAC分析による北米アカデミック・インターンシップ経験学生の就職内定までのキャリア発達の研究

上西智子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

本研究での北米アカデミック・インターンシップは北米における大学正課科目であるインターンシップ科目に参加しながら、業務に関連する専門科目をセメスター単位で履修するものである。日本経済団体連合会は2030年の姿として採用の多様化や実践的な長期インターンシップと採用

との接続をあげているが、長期インターンシップにおけるキャリア発達の研究は少ない。本研究では内藤（2002）のPAC（個人別態度構造）分析を採用する。PAC分析は個人の潜在的な態度行動を発見できることから、海外での生活、大学での学び、業務経験、就職活動といった多様な経験を通じて、学生のキャリア発達の構造の検討が可能であると考えられる。新型コロナ感染症の影響によりインタビュー調査はオンライン上で実施した。研究協力者が筆者のパソコン上のシステムを遠隔操作し調査を進めた。録画データからインタビュー時の研究協力者の態度・表情を観察することが可能となった。

成人期ゲイ男性におけるゲイアイデンティティの変容過程——2つの生活世界における親密性に着目して

太齋慧（東京大学大学院教育学研究科）

本研究は、成人期のゲイ男性が当事者同士のつながりと異性愛者とのつながりという2つの生活世界における親密性を通してゲイとしてのアイデンティティを変容させるプロセスを検討したものである。当事者15名を対象とした半構造化インタビューのデータについてM-GTAを参照したカテゴリ分析を行った結果、2つのつながり双方において「ゲイとして生きる自己」「ゲイとして生き難い自己」が強まるプロセスが見出された。相反する2つの自己の間では、他者からの承認を通してゲイであることをノーマライズし生き方の基礎として意味づけ直す語り、ゲイとして生きることと「普通の人生」への希望との間での葛藤が強まる語りが見出された。この葛藤はマイノリティとしての「分離」とマジョリティへの「同化」が同時に強まるという、従来のモデルでは捉え難い状態像であり、2つの生活世界を生きながら生き方における両世界の差が顕在化し問題化してくるという同性愛者のマイノリティとしての特徴を示唆すると考えられる。

人工物との出会いによる活動の変容の語り：越境としてのクラウドファンディング

中村雅子（東京都市大学メディア情報学部）

クラウドファンディングの認知度は近年、急速に高まっているが、一般の人々のイメージと実際に取り組んだ経験者の理解の間には大きな差がある。特に従来、情報テクノロジーについて必ずしも積極的に関与していなかった地域活動等の関係者にとっては、クラウドファンディングは資金的な支援を得る新たな選択肢として直ちに目に入るとは限らない。実際に取り組むまで、また取り組んだ後にも、さまざまな障壁や経緯の中でクラウドファンディングの実践が変容（カスタマイズ）され、また活動や従事者にも変化が生まれる。本報告では、このようなダイナミックな関係を実際に取り組んだ当事者の語りから分析する。クラウドファンディングという新たな人工物との出会いによって、生じる新たな越境や学習、さらに新たな境界切断について検討する。

複数の場を通して形づくられる自己のありようを捉える：不登校経験のある女子高校生とのインタビューから

神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）

質的研究はこれまで、状況の中で形づくられる子どもの学びや自己形成のありようを描出してきた。とりわけ、1つの場での交流記録をもとに状況とともにある自己を描く研究と、状況とともに変わりゆく当事者の人生を描く研究が発展してきた。しかし従来の研究では、1人の人間がさまざまな場を横断しながら学び、自己形成するありようを十分に描いてきたとは言い切れない。不登校に関しても、子どもたちが家庭や学校、フリースクールや趣味といった様々な場を通して変わることが示唆されてきたが、それぞれの場の繋がりとは検討されてこなかった。そこで本研究では、社会文化的ライフコース論（Zittoun, 2012）ならびに行動の三角形（山田, 1986; やまだ, 2010）を援用して、不登校経験者がさまざまな場を通して自己を形づくりのプロセスを描出することを試みた。本発表では、事例報告を行い、場のつながりと自己形成のプロセスについて考察を行う。

混住寮における対人関係形成に関する縦断的研究—留学生居住者の事例—

中野祥子（山口大学留学生センター）・田中共子（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

留学生と日本人の混住寮に住む、アジア出身留学生1名（以下Aさん）を協力者として、入寮直後から1年間の対人関係と、関連する認知・感情・行動に関して、4度の面接と質問紙による縦断研究を行った。本研究は、人を対象とした研究ガイドラインに基づき倫理的配慮のもとに行われた。Aさんは、混住寮での出会いを起点に対人関係を展開した。初期にはルームメイトを中心とし、やがて部屋や寮の外に関係が移っていった。来日初期は日本人には間接表現を使うなど、文化的な対人スキルを行使したが、時間が経つと「ありのまま」に変わった。混住寮のリーダー

役の日本人は留学生居住者との関係構築を使命と捉えていたが（中野・田中，2020）、Aさんは寮にこだわらず、留學生活の充実のため、精神的癒しに同国人、外国語習得に他国人など選択的に関係を築いた。関係の質による距離の調整や確保も対人スキルといえる。初期の孤立防止は寮の機能の一部と考えられた。

実感や身体感覚に迫る「質感」的心理学（qualia-tative psychology）についての構想 —トランスジェンダーを生きる体験についての語り合いをもとに

町田奈緒士（京都大学大学院人間・環境学研究科）

従来の質的研究においては、インタビューにおける調査者の存在は黒子とされ、調査者の「主観」の記述は、調査の客観性を歪めるものとされてきた。しかしながら、協力者の体験に伴われる実感や身体感覚に焦点を当てようとする場合、調査者を無色透明の存在とするアプローチでは取りこぼされてしまう側面が立ち現れる。

本報告では、調査者が間身体的・間主観的に感受したことを分析の俎上に載せるアプローチである語り合い法を用いたインタビューの一部を提示することを通じ、協力者の体験に伴われる実感や身体感覚、すなわち体験の「質感」を明らかにすることを試みる。具体的には、トランスジェンダーを生きる協力者と調査者との当事者同士の語り合いの分析を通じ、二人のあいだで生じていたことについて考察する。報告を通じて、人々の体験の「質感」を明らかにするような質的心理学研究のあり方について、参加者のみなさまとの対話を通じて考えていきたい。なお、調査結果の公開については同意書をもって協力者からの承諾を得ている。

コスプレの魅力とは—歴史的検討とフィールドワークの融合を目指して

福山未智（立命館大学大学院人間科学研究科）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

コスプレという遊戯の魅力を解き明かすには、現状の調査と共に歴史を知ることが重要である。だが、コスプレの誕生や発展過程については一論文の冒頭で記述されていることが多いものの、体系的に記されたものはあまりない。本研究では一次資料である世界 SF 大会のパンフレットとコミックマーケットのパンフレットを用いて、筆者の卒業論文（福山、2013）で明らかにした時間的経緯を文化史的考察に展開することを試みた。コスプレの起源は 1939 年開催の第一回世界 SF 大会（Nycon1）、現在の日本的なコスプレの誕生は 1974 年開催の第 13 回日本 SF 大会（MIYACON）である。日本ではその後コミックマーケットにてコスプレイベントのルール等の大枠が作られていき、参加者の増加や表現方法の多様化が現れ、それが日本発文化として逆に世界に広まった。このようにして始まったコスプレが現在どのように実践されているのかについては自身のフィールドワークや調査を踏まえて検討していく。

社会的に困難状況にある子どもたちのニーズと課題：「はなれる」支援実践からの検討

保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

「子どもの貧困」は、保護責任者の経済的貧困により衣食住が満たされないことのみならず、社会的つながりそのものから排除されてしまう「社会的排除」の課題として認識されるべきものとなっている（リッジ，2002/ 2010 他）。さらに子どもたちは、家庭で過ごすなかで育まれるべき「生活力」を身につける機会を奪われることとなっている。このような環境にある子どもたちが、同じ環境から脱するためには、自らの力で生活する力、そして社会とつながる場を見出す必要があるだろう。

ここでは貧困状況にありながらも公的支援の網からこぼれ落ちてしまう子どもたちを対象とした支援活動を取り上げる。とくに長期休暇を利用して行われた、子どもたちを親元から離し、自らが生活するために必要な自律した生活力の育成の試みでは、何かが劇的に変わるわけではなかったが、自分で生活する経験とそれを支えてくれる大人たちとの出会いは、子どもたちが自立していくうえでの大きな一歩を助けることになるだろう。本発表では、実践にかかわった大人たちおよび子どもたち自身の語りから、社会的貧困状況にある子どもの育ちの課題について検討してみたい。

PCK を視座とした音楽科教師の実践知分析

高見仁志（佛教大学教育学部）

教師教育充実の緊要性が、近年ますます声高に叫ばれている。そのような中、2015 年には中央教育審議会が、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について一学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて一」という、今後の教師教育の核となる答申を発表した。この報告では、PCK 理論から教科教育について言及されている。この内容を検討しながら、音楽科の教師教育の在り方を捉えることは焦眉の課題であると考えられる。そこで、次の2点を目的として研究に取り組んだ。

- 1)PCK 理論を視座として中教審第184号を解釈し、教科の立場から教師教育の方向性を整理する。
- 2)PCK は教師の実践知であるとの立場から、音楽科授業における新人教師の実践知を解明し、教師教育への提言を試みる。

本発表では、PCK を基礎理論として、音楽科新人教師の実践知を再生刺激法により解明し教師教育への提言を行う。

自傷行為としての「ニキビ潰し」への主観的意味付け：青年期の者2名の語りの分析

新井素子（東京大学大学院教育学研究科）

本研究は、自傷行為としての「ニキビ潰し」に行為者が与える意味付けを検討し、その体験の特

徴を明らかにしたものである。対象者は、自傷行為として「ニキビ潰し」を申告したAさん（男性、24歳）とBさん（女性、23歳）である。両名のデータをLabov（2013）の方法でナラティブ分析し、「ニキビ潰し」の意味付けを抽出した。その結果、両名に共通して、「ニキビ潰し」には肌を綺麗にする目的があるが、「ニキビを悪化させる」ため「やってはいけない」と思いつつも行為を続けることが示された。双方とも行為に対し感情が改善する旨の意味を与えていた。また、2人には視覚的な自己像にまつわるネガティブな体験があり、ニキビを除くことで自己像を回復させようとしていた。自己切創の意味付け（新井、印刷中）と比べると、傷に言及する点は共通するが、自己切創では特に痛みに注目するのに対し、「ニキビ潰し」では痛みよりも傷つけられる皮膚の方に注目することが分かった。

学習のなかの批判的思考（1）：経験年数の違いから見たソーシャルワーク実践と学習過程

久保田祐歌（関西福祉科学大学社会福祉学部）・新原将義（帝京大学高等教育開発センター）・
寶田玲子（関西福祉科学大学社会福祉学部）

批判的思考を大学教育で育成するアプローチとしては、高等教育における教育目標として一般的な批判的思考の概念を定義してから育成方法を検討するものと、学問分野や領域における内容に依存した批判的思考の概念を定義してから当該の分野における育成方法を検討するものの二つがある。本研究では、後者のアプローチに基づき、社会福祉学分野で育成すべきコンピテンシーのうちに批判的思考がどのように位置づくかを明確化し、教育目標として定義することを目的としている。この目的を達成するためには、現場で働く熟達した社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）の学習・思考プロセスにおける批判的思考の位置づけを明確化する必要がある。その予備調査として、新任・中堅・ベテランの3名のソーシャルワーク経験者を対象にグループインタビューを実施し、相談援助における学習過程と批判的思考との関連を分析した結果について報告を行う。

教室における「適切性」から考える「特別な支援が必要」な子どものコミュニケーションの様相 司城紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）

本研究は、通常の学級において「特別な支援が必要」とされる子どものコミュニケーションの様相を、教室のコミュニケーションの特徴との関係という視点で検討するものである。小学校2年生の学級を継続的に観察し、担任を含めた複数の教師から落ち着きのなさや不注意傾向、会話における相手の意図を読むことの困難さが指摘されている児童のコミュニケーションにかかわる事例を収集した。ビデオ撮影を含めた記録方法と記録の研究論文への活用については事前に学校からの許可を得た。

各事例において、教室で「適切」とされる言動から外れていると考えられる行動をとりあげ、それらの言動が「適切」でないと考えられる根拠について、規範が明示的に説明されるものであるか、そのルールが継続的に保持されているかという2つの視点から検討した。規範から外れた言動は、教室における「適切性」を周りの子どもたちに認識させる機会となると同時に、その流動化の契機ともなっていることが示された。

新型コロナウイルス禍における台湾の市民社会

李勇昕（京都大学防災研究所）

台湾は現在、新型コロナウイルスの感染を有効的に抑えていると言われる。これまで国際的に孤立していたが、「防疫の優等生」、「各国の学びの対象」とイメージが急速に転換した。コロナ禍に向けて取り組みの成功は、台湾の市民社会に多大な影響を与えた。本研究は台湾政府の対策といったトップダウンの視点ではなく、市民社会では、人々はどのように防疫に関する支援を実践したのかについて着目した。具体的には、地域コミュニティにおける防疫に関する支援活動、および若者の SNS による「マスクの譲り合い」および海外の国を支援する「Taiwan can help」運動を事例にする。研究方法はインタビュー調査と資料収集法である。以上の事例を通じて、これまでの災害から身につけた支援のあり方を今回の防疫においても市民が発揮したことが明らかとなった。市民それぞれの社会的実践を通じて、「より良い社会」に改善しようとしているのである。

インプロ実践者がパフォーマンス過程において直面するジェンダー・バイアスの問題 —スポンタネイティとステレオタイプの狭間で—

園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）・直井玲子（青山学院女子短期大学子ども学科）

本研究の目的は、インプロ（即興演劇）の実践者がパフォーマンスの過程でいかなるジェンダー・バイアスの問題に直面するのかを、“実践者であり研究者でもある私たち”が相互にインタビューしあうことを通して析出することである。筆頭発表者と第二発表者は、現在、各々のフィールドでインプロの実践的研究に取り組んでいる。本研究では、互いのこれまでのインプロ実践をジェンダーという視点から詳細に聞きとり、また聞きとった内容に関してさらなる対話を複数回重ねることで、インプロにおけるジェンダー・バイアスの問題の様相を描き出すことを試みた。

その結果、鍵概念として「スポンタネイティ」（spontaneity、無理にアイデアを出そうとするのではなく自然にアイデアが思い浮かぶことを意味する、インプロで重視される考え方）と「ステレオタイプ」が浮上し、インプロ実践者として直面するジェンダー・バイアスの問題は、この両者の対立のなかで捉えられることが見出せた。

男性中心の物語構築を乗り越えるためのインプロ上演形式 The Bechdel Test の理念—考案者 Lisa Rowland への聞き取り調査及び実践における語りを中心に—

直井玲子（青山学院女子短期大学子ども学科）・園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）

本発表では、インプロにおけるジェンダー・バイアス克服のために米国の実践家 Lisa Rowland により考案された上演形式 The Bechdel Test (BT) の背景にある理念を、彼女への聞き取り調査及び筆頭発表者が参加したワークショップの記録をもとに明らかにすることである。

その結果、「“What comes next?”（次どうなるか）ではなく“What else?”（ほかに何がある

か)」がBTの根幹の理念であることが明らかとなった。これまでのインプロ実践では、前者、すなわち物語を進めることに主眼が置かれてきた。そしてその多くは現実の社会構造を反映し、男性中心の物語となってきた。対してRowlandは、BTのなかで“What else?”を反映させた構成をとる。具体的には、第1に、モノログ、つまり心の中に抱いた思いを語ることである。BTではこの役割を女性演者が担うと決められている。第2に、スナップショットと呼ばれる、その女性を主人公とした短時間の場面の連なりである。そのとき重視されるのは女性が主人公の物語をつくることではなく、その女性の多様で複雑な姿を見せることが目指されるのである。

親の離婚を経験した青年の家族意識 ―子に対する親の自己開示と青年期以降の子の家族意識との関係の検討―

李吉雨（茨城大学大学院人文社会科学部研究科）

本研究は、親の離婚を経験した筆者による対話的自己エスノグラフィーを通して、離婚した親が青年期以前の筆者に対する自己開示を振り返って分析した上で、青年期以後の家族意識にそれがどのような影響を与えるかを明らかにする。本研究では「家族意識」を、定位家族（生まれたところの家族）・再編家族における父母認知・きょうだい認知、「家族観」、結婚に対する態度から捉える。認知発達モデルと社会的学習理論に従い、親の自己開示が子どもの青年期以後の家族意識に影響を与えるという仮説を立てた。そして自分の物語をデータとし、さらに分析に関する対話者との対話もまたデータとし、円環的にデータ収集と分析を繰り返した。親の離婚を経験した人たちが「親の家族に関する価値観」を模倣するという点と、そのような価値観からの解放という点との間での揺らぎに着目し、親の離婚を経験した人たちの青年期以後の家族意識の特徴を明らかにした。

学習のなかの批判的思考（2）：18歳選挙権世代の政治的態度とその学習過程

新原将義（帝京大学高等教育開発センター）

2016年施行の改正公職選挙法によって、選挙権年齢が18歳に引き下げられた現在、10代・20代の若者がいかに政治と向き合い、自らの政治的な考え方や態度を学習するかが大きな課題となっている。このことについて考える萌芽とするため、本研究では1997年6月23日以降に生まれ、18歳当時に選挙権を有していた「18歳選挙権世代」の若者が国政選挙や政治にどのように向き合い、どのような考えをもっているのか、またそのような態度や自らの考えをどのように学習しているのかについて明らかにすることを目的とし、18歳選挙権世代の若者4名にインタビュー調査を実施した。

今回調査を行った協力者は、選挙に投票に行くことに対して消極な若者から、自ら特定政党の集会に参加した経験をもつ若者まで、多岐にわたった。発表では、彼らの政治に向き合う態度や他者との対話の特徴、またこれまでの学校教育から受けた影響などについて、詳細な報告を行う。

阿吽の呼吸で実践される清拭—新人とベテラン看護師との比較—

齋藤貴子（日本赤十字秋田看護大学看護学部）

整形外科病棟にてフィールドワークを行い、現象学的看護研究より運動領域の看護実践を記述した。入浴できない患者の身体を清潔にするために、清拭が行われる。看護師Aさんがベテラン看護師と行った清拭と、Aさんが新人看護師と行った清拭の場面を比較し、報告する。

ベテラン看護師と共に行った清拭では、患者の大腿を見るやこの脚に生じるであろう痛みが看護師たちに先取りされて知覚されていた。この痛みの知覚によって、打ち合わせることなくとも側臥位するのを1度だけで清拭を完遂させる手筈を看護師たちにとらせていた。また実際に痛みを訴えると、その痛みに応じるよりも同調しつつ手を動かすことで、痛みが生じる時間を最小限にしていた。一方新人看護師と行った清拭では、患者が感じてしまうだろう痛みを察知して予告し、生じた痛みには同調しつつ、少しでも痛くないように新人の手を誘導し、Aさんがけん引する形で清拭が行われていた。本研究は所属先の研究安全倫理委員会の承認を得てから実施した。

フィリピン・ラグナ州における有機農業アクター間の情報共有とその影響

アキノエリザ カテロ（東京農業大学大学院農学研究科国際バイオビジネス学専攻）・稲泉 博己（東京農業大学国際食料情報学部）・下口ニナ（東京農業大学国際食料情報学部）・鈴木聡志（東京農業大学教職）

フィリピンでは、有機農業運動（OA）は1980年代初頭に始まり、2010年に有機農業推進法を制定された後、中央政府も積極的に関わり始めた。しかし政府による支援にもかかわらず、OAの採用率が低いまま推移した。その原因は、政策ギャップ、生産支援不足、不十分な研究開発・普及にあるのではないかと。OAの採用率を高めるには、効果的な情報共有が必要である。そこで本研究では、ラグナ州における農家と周辺のアクター間の情報共有と、各アクターへの影響を明らかにするため、教育・研究機関6か所及び農家30名とその家族の語りに焦点をあて、ライフ・ヒストリー・アプローチ、GTAアプローチ、複線経路等至性アプローチによる分析をした。その結果強い相互作用と影響が見られたのは、家族、近所の農家、一部の機関等、主に個人情報源からだった。

なお本研究の対象者には、文書によるインフォームド・コンセントを行い、調査参加の意思確認を行った。

生涯学習センターで学び続ける意義 —高齢者のライフストーリーに着目して—

杉浦彰子（茨城大学大学院人文社会科学研究科）

本研究の目的は、生涯学習センターに通う高齢の学習者が学び続ける意義を明らかにすることである。生涯学習センターに勤務する中で筆者は、高齢の学習者が学び続ける理由が単に知識の向

上や生きがいづくりではないと感じ、学習者個々のライフストーリーに着目することで、新しい知見が得られると予想した。生涯学習には、社会の視点（生涯学習社会実現にむけて学習者に何を学ばせるべきかという社会の要望）と個人の視点（個人的な学びたいという要請）の2つに分けることができ、本研究は先行研究の少ない後者の視点に注目した研究である。研究方法として半構造化インタビューを用い、60～90代9名のライフストーリーを聞き取った。その語りからは、学ぶきっかけは「過去の清算」にあることが多いものの、学び続けるうちにそれを克服し、新しい目標を見つけて歩みだしていることがうかがわれ、それが長期的な学びにつながっていると考察された。

重度障害児・者をケアすることの意味（１）：対話的自己論から福祉援助職の体験を読み解く

大瀧玲子（東京大学大学院）・広津侑実子（東京大学大学院）・沖潮満里子（湘北短期大学）・尾見康博（山梨大学）・能智正博（東京大学大学院）

重度の障害児・者のケアには独特のストレスがあるといわれるが、援助者はどのように困難に対処しながら援助活動を継続しているのだろうか。筆者らは、知的障害者の援助に関わる専門職と家族10名を対象に、日々の援助活動において感じる困難とその対処についてインタビュー調査を行い、グラウンデッドセオリーアプローチを用いてデータを整理した上で、対話的自己理論を念頭に分析を行った。本発表では、福祉援助職の結果を示す。

援助者は、障害者との関係のみならず、他の援助者や社会との関係性の中でストレスを抱えていた。特に援助観を共有することで他の援助職とつながれるか否かという点が、援助者にとって援助活動の支えにも困難にもなりうるということがわかった。援助者は、1対1の関係で対象者と向き合っているように見えて、実は複数の「援助者」という「我々」とポジショニングすることで対象者と向き合っている可能性がある。

重度障害児・者をケアすることの意味（２）：対話的自己論から障害者家族の体験を読み解く

広津侑実子（東京大学大学院）・大瀧玲子（東京大学大学院）・沖潮満里子（湘北短期大学）・尾見康博（山梨大学）・能智正博（東京大学大学院）

発表（１）に引き続き、障害者をケアする側の語りの分析結果を提示する。障害者家族の語りにおける対話的自己の特徴を探り、彼らがどのように体験を意味づけているのか、そのなかでどのような「自己」を作り上げているのかといった点について検討する。分析対象は成人障害者の母親2名、父親1名への半構造化インタビューである。グラウンデッドセオリーアプローチを参考に、対話的自己論を念頭に置いた探索的な分析を行った。結果として、障害をもつ子との一対一の関係に関する語りが多く、自立を考慮に入れつつも、まずは守り育てる“親”というI-ポジションをもち、障害者の変化を「成長」として意味づける傾向が見出された。対象者は社会の障害者への見方を取り入れて家族自身も「迷惑をかける存在」とポジショニングしがちであるものの、他の障害者家族・支援者の声などを取り入れることでI-ポジションを変容させていた。考察として、福祉援助職の語りやI-ポジションとの共通点・相違点についても検討していく。

コロナ禍にある大学教員のライフの転機に関する考察—発生の三層モデルとイマジネーション理論による図式化の試み

小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）

発生の三層モデル（TLMG）は「人間の内的な変容過程を、文化的な促進的記号と信念・価値観との関係でとらえ理解するための理論」（能智他, 2018, p. 249）であるが、人びとのライフ（生命・生活・人生）が「実際に何をしたか、あるいはどのように現実を経験したかのみではなく、大部分をイマジネーションが担う」（ジトウン, 2015, p. 99）とすれば、TLMGによる分析にイマジネーションの働きを組み込むことは当然の帰結であろう。本発表では、COVID-19を経験する中で「平和に過ごせる社会」を希求して生きる大学教員のライフを対象とし、複線径路等至性モデリングにより径路を特定した上で、分岐点におけるイマジネーションの展開の解明を踏まえ、TLMGによって図式化した結果を報告すると共に、この手法によって TLMG の第 2 層（状況を意味づける記号が発生する記号のレベル）の分析が精緻化し得ることを指摘する。

コロナ禍に伴うテレワーク化による職場の雰囲気や関係性の変化 -テレワークが社内コミュニケーションに与える影響（3）-

原恵子（筑波大学働く人への心理支援開発研究センター）・松井豊（筑波大学働く人への心理支援開発研究センター）・藤桂（筑波大学大学院人間総合科学学術院）・福林直（筑波大学働く人への心理支援開発研究センター）・御手洗尚樹（筑波大学働く人への心理支援開発研究センター）・中村准子（筑波大学働く人への心理支援開発研究センター）・岡田昌毅（筑波大学大学院人間総合科学学術院）

新型コロナ禍に伴いテレワークを導入する企業は著しく増加し（東京都, 2020 ）、対面集合型とは異なる職場環境が急速に進んでいる。「従来とは違う仕事のやり方への戸惑い」を感じる者は 37.7%であるとの意識調査もある（NTT データ経営研究所, 2020 ）。そこで、本研究ではテレワークが社内コミュニケーションに与える影響、特に職場の雰囲気や人間関係の変化について検討することを目的とする。コロナ禍に伴いテレワークが導入された企業勤務者を対象として、2020 年 6 月にウェブ調査を行い、343 名（男性 210 名、女性 130 名）の回答を得た。本発表では「テレワーク化による職場の雰囲気や人間関係の変化」（自由記述）に記入のあった 281 名を分析対象とした。意味を持つ文節ごとにデータ化し 350 データが得られた。第 1 著者が一次分類し、第 2 第 3 著者による確認と討議を経て KJ 法の援用による分析を行った。その結果、「雑談が排除されがち」「交流する人（範囲）の狭まり」「丁寧なコミュニケーションへ」「文字情報の限界」など 43 小分類が抽出され、小分類は 8 つの中分類へ、さらに 4 つの大分類（業務遂行上の変化、コミュニケーションや関係性の変化、個人の意識の変化、変化なし）へと整理された。

第二言語使用場面での心理的ストレスに対するレジリエンス理論構築に向けての予備的調査

清田顕子（早稲田大学大学院教育学研究科）

第二言語使用場面での心理的ストレスについて、レジリエンス概念の借用が提言され始めている（e.g. 田口，2016；Oxford & Gkonou，2018）。第二言語習得理論におけるレジリエンスの研究が萌芽的な現状において最終的に理論構築を目指すために、発表者は予備的調査を行っている。本発表では、英語を苦手とする大学生の1年間にわたる英語ラウンジ訪問を研究対象とし、レジリエンスの過程の把握とレジリエンス要因の探索を目的とした調査の結果を発表する。37人の英語ラウンジ訪問の振り返り日誌、教員（発表者）の介入の記録とそれらに対する学生の振り返り日誌、2人のインタビュー・データを収集した。帰納的なテーマ分析を行い、感情の変化に着目して社会文化理論の観点から考察した。結果として、逆境の状況を言葉によって外在化しリフレーミングする機会、困難を共に乗り越えるピアの存在、アドバイスを与える先輩の存在、英語話者との関係構築が重要な要因として浮上した。

ドバイの小規模自助グループにおける継承日本語教育

谷口ジョイ（静岡理科大学）

海外に居住する「日本にルーツをもつ子どもたち」が、継承日本語を学ぶ場としては、教育機関、家庭のほか、保護者が運営する自助グループが挙げられるが、その実態については不明な点が多い。本研究では、アラブ首長国連合ドバイで活動する自助グループにおいて参与観察、及び保護者に対するフォーカスグループ・インタビューを実施し、その教育活動について多角的・包括的に検討している。

ドバイは、定住外国人が少ないことで知られ、グループに参加する家族も流動的であるが、保護者の価値観はグループ内で概ね共有されていた。保護者は「日本の学校教育においてふさわしいと考えられる行為や言語表現の系列」の習得を子どもたちに期待し、授業形態や行事での国歌斉唱など、日本の学校で形成されるスクリプトが、グループの教育活動を方向づける重要な要素となっていた。

「見方・考え方」の変容過程と外国語学習 - 地方出身学生の視点から -

早崎綾（早稲田大学大学院文学研究科）

外国語学習の教育的意義は、対象言語の習得そのものから得られる便益に留まらず、異なる文化や価値観との接触を通じて自他理解を促進する点にもある。本研究では、海外学生との交流を含む英語での課題研究プロジェクトによって希望進路を含む人生観が変容した南九州地方出身の女子大学生3名を事例とし、それぞれの変容過程とそこでの外国語の役割について探索した。データ収集・分析には複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach, TEA; 安田&サトウ, 2017) を用い、各々の語りから、個人と社会文化との相互作用がどのように価値変容に結びついたか検討した。

発達障害傾向を持つ子どもの保護者の視点による教師との関わり

角南なおみ（鳥取大学医学部）

近年発達障害の可能性の段階からの支援が重視されている（文部科学省，2017）。それには発達障害が脳器質性の疾患であることに鑑み，学校と家庭との連携による環境調整が必要となる（角南，2018）。そこで本研究では，よりよい連携を目指し，発達障害特性を持つ子どもの保護者における教師との関わりを明らかにすることを目的とする。医療機関を受診した経験のある2名の保護者に半構造化面接を実施した。保護者は最初，発達特性の受け入れが難しい場合も多いが，一方で幼少期の子どもの様子から疑いを持っている場合もある。本研究の研究協力者は後者であり，その場合子どものよりよい支援のための具体的対応を求め，早期からその実施を望むことが示された。そのため，教師は保護者の障害受容段階を見極め，そのニーズに沿った対応が求められることが明らかになった。今後は特性のある子どもだけでなく保護者のニーズを検討していくことも必要だろう。

自閉スペクトラム症の人は描画体験を繰り返すことでどのように自己理解を深めるか—PAC 分析を用いた事例研究—

石川千春（東京大学大学院教育学研究科）

自閉スペクトラム症（ASD）者は社会的相互作用の困難から自己理解を促進させにくいとされる。自己理解には他者参照能力が必要であることが明らかにされている（高岡，2017）が，社会的相互作用の困難をふまえると，言語表現のみによって促進させることは限界があるといえる。そこで本研究では，非言語的表現である描画を用いて ASD 者が自己理解を促進させられるかを探索的に調べることにした。一事例に対し自分描画法と PAC 分析，自己理解質問を組み合わせた調査を3セット実施し，自己理解言及の変化と，描画後の語りについてはPAC分析を援用して検討した。その結果，悩みの明確化や自己の感情への気づきを経て，3セット目では実生活での他者交流の増加，勤務の安定という行動の変化，感情の安定化，肯定的に考える認知の変化が明らかとなり，自己理解の促進がうかがえた。描画による自己の外在化は，自己理解の一助となる可能性が示唆される。なお本調査にあたっては倫理的配慮に十分留意し，書面による同意を得て行った。

ASDのある生徒と合意形成する教師の実践的思考

呉文慧（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

教育においては教師と生徒がコミュニケーションし、合意形成していくことが重要である。しかし ASD のある生徒は DMS-5 の診断基準にもあるように、他者とのコミュニケーションに困難を抱えている。そこで、本研究は教師が ASD のある生徒と合意形成する際にどのような実践的思考様式に依拠しているのかを明らかにすることを研究目的とした。

研究方法は、実践当事者に自らの実践の映像記録を見せ、グループインタビューを行うというビデオ再生刺激法を採用した。対象者は特別支援学校高等部の教員2名で、映像はASDのある生徒1名との交渉を記録した授業場面を抽出した。また、集めたデータはベナーの解釈的現象学の立場から分析した。

その結果、教育において、教師は子どもの実態と自身の教育的意図に則して「枠」を設定しており、その枠に依拠してASDのある生徒とコミュニケーションし、合意形成を図っていることがわかった。

乳児が育つ保育環境を保障する保育者の成長プロセスに関する研究(2)

仲本美央（白梅学園大学）・久居麻紀子（音のゆりかご保育園）

本研究は、どのような経験年数や役割を持つ保育者においても、乳児が育つ保育環境を保障する保育者として自らの保育実践を振り返ることの重要性を認識し、自らの保育の質を捉える専門性を高めるための保育者研修プログラムの開発とその研修の効果を検証することを目的としている。本大会の発表では、対象とする保育現場のクラスの担任保育者の一年間におけるエピソード記録を元に、「保育実践の解説図の作成と対話的な振り返りを含めた保育者研修」を実施し、研修プログラム実施前後の保育者の自らの保育の質に対する認識をインタビュー調査し、質的データ分析手法SCATを用いて分析した結果を報告する。なお、本研究は、研究代表者の研究倫理審査を経て承認が得られ、所属の研究倫理に則り、実施している。

血糖値のセルフモニタリングで生まれるつぶやきの現象学的記述 ―他者に届けることの意味

細野知子（日本赤十字看護大学看護学部）

糖尿病治療で自己注射中の人びとは、血糖値をセルフモニタリングして生活を振り返り、病状コントロールを図る。その中では、毎度の値に一喜一憂してつぶやきたくなる状況もある。本研究の目的は、血糖値のセルフモニタリングで生まれたつぶやきの意味を現象学的に記述することである。糖尿病治療薬を自己注射し、1日2回自己血糖測定しているAさんは、つけたい時につぶやき記録をつける本調査に参加し、ソーシャル・ネットワーキング・サービスを介して「おやつを少し頂いて夕方の血糖値が187…おやつの力は強い…」 「下がりました！117です」等のつぶやきを研究者に送るようになった。1年以上に渡り不定期に届いたそのつぶやきは、血糖値に関することから、定期受診時の検査値や主治医の見解、別の体調不良に関することまで広がりを見せた。セルフモニタリング中の糖尿病患者がつぶやき記録を他者に届ける営みに含まれるケアの可能性を考察する。

新型コロナウイルスの拡散とリスクに関する調査（１）——「水平線的記号」は何を明らかにするか

伴野崇生（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科）・土元哲平（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）・宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）・上村晃弘（立命館大学衣笠総合研究機構）・木戸彩恵（関西大学文学部）・卒田卓也（近畿大学心理臨床・教育相談センター）・田中千尋（立命館大学大学院人間科学研究科）・横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

新型コロナウイルスの拡散とリスクに関する国際共同研究に参加して調査を実施した。この調査では、新型コロナという記号化しづらい未曾有の状況に対して、人々が抱く社会的な認知を明らかにするために、水平線的記号(horizon sign)を理論的背景とする「A but B」の形式の自由記述を得る設問について回答を得た。水平線的記号とは新たに出現し、まだ記号化されていない「意味づけ」が、その人の意味づけの領域に入ることの可能にする特定の記号(but や now など)である(Hammer ら, 2019)。まず、日本で収集した 273 名分のデータにおける 3 つの回答の自由記述について KJ 法(川喜田, 1986)に準拠して 3 ステップでカテゴリーを生成し、各概念を空間的に配置した上で図解化・文章化を行った。その結果、「不安・恐怖 but 未来展望／関係志向／現実の受容」といった人々の意味づけが示された。また、水平線的記号は、新型コロナのような例外的事象における経験の記号化を促すことが示唆された。

新型コロナウイルスの拡散とリスクに関する調査（２）——定量的分析の結果と混合研究法の意義

宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）・土元哲平（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）・伴野崇生（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科）・上村晃弘（立命館大学衣笠総合研究機構）・木戸彩恵（関西大学文学部）・卒田卓也（近畿大学心理臨床・教育相談センター）・田中千尋（立命館大学大学院人間科学研究科）・横山直子（立命館大学大学院人間科学研究科）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

本発表では（１）に引き続き、日本で実施したデータを混合研究法で分析した結果について主として統計的分析を中心に発表する。調査参加者は、20～64 歳の年齢層・民間企業勤務が中心だった。記述統計の概要は、(A)現状に不安があり、長期的な影響があると考えている、(B)政治・科学・宗教への信頼感は低いものの、科学は他と比べて信頼されている、(C)発信されている情報は不明確で分かりにくい、自分たちなりに信憑性をチェックしていると整理することができる。次に、定性的データの KJ 法による分析結果から得られたカテゴリーである「不安・恐怖」や「未来展望」を踏まえ、これらに関連する項目について因子分析(最尤法・斜交回転)を行い「未来効力感」「混乱と不安」を抽出した。最後に、定性的分析で得られた結果を踏まえて、定量的分析を実施する混合研究法の意義として、ステップを検討したり分析を進めたり際のガイドになること

を見出した。

中国から帰化した「日本人」のアイデンティティ

王瑩（茨城大学大学院人文社会科学研究科）

筆者は、日本へ留学する前に母国の中国で、16年間生活した実家のある故郷を離れ、その後の10年間は北京で生活した、それをきっかけに自分は故郷への帰属感が乏しくなり、自身のアイデンティティに悩みを持つようになった。その後、知り合いの中国人のなかには日本へ帰化した人が増え、国籍を超えていく彼ら彼女らのアイデンティティのあり方に筆者は関心を抱いた。総務省の統計によると、1967年以来、中国からの帰化者人数は韓国からの帰化者に続いて2位になっている。母国を離れ、経済・文化・社会などまったく違う国に生きていく彼らは、自分アイデンティティをどう認識しているだろうか。本研究は、日本で生活し始めた時から帰化した現在に至るまでの、そのような「日本人」たちのアイデンティティの構成と変化を明らかにすることを目的とする。そのために、複線経路等至性モデリング（TEM）で成長と時間的变化を文化社会的文脈との関係を捉えることを試みた。

日韓関係悪化の状況下で構築される在韓日本人女性のナショナル・アイデンティティに関する考察 -2019年夏に韓国で起こった日本製品不買運動に関する語りの分析を通して-

竹村博恵（大阪大学大学院言語文化研究科）

2019年夏の日韓関係は、政治的な問題で関係が悪化しても経済的・社会的な関係はそれとは異なったものとして維持する、という両国のこれまでのあり方が崩れた状況であった。本研究の目的は、韓国人男性と国際結婚をして韓国に移住し、日韓ダブルの子供を育てながら生活している日本人女性たちが、2019年の夏に韓国で日本製品不買運動が生じた際、自身の置かれた状況をどのように捉え、どのように日本人としての自らを位置付けながら、日本人としてのナショナル・アイデンティティを構築していくのかを、彼女たちのインタビューの中に現れるスモール・ストーリーの分析を通して明らかにすることである。本研究では、インタビューという相互行為の場の中に現れるスモール・ストーリーを、語り手のアイデンティティが継続的に実践され、試されている関わり合いの場として捉え、分析に際しては、Bamberg（1997, 2004）の提唱したポジショニング分析を採用し、在韓日本人女性たちが語るスモール・ストーリーを3つの異なったポジショニング・レベルから分析していく。

小学校算数授業における聞き手の役割

横山愛（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科）

本研究の目的は、小学校の算数授業において聞き手の子どもたちが意見を発表する話し手の子どもたちにどのように反応し、授業でどのような役割を果たしているのかを明らかにすることである。小学校一年生の授業を対象に教師—発言者—聞き手の子どもたちのそれぞれの発話回数や内

容の分析、授業の事例について考察を行った。その結果以下のことが明らかになった。1. 聞き手が話し手の意見に対して同意する場合には、話し手の意見と自分の意見を比較し、自分の考えを位置づける発話をしていた。2. 聞き手が繰り返し納得する発話を行い、全体の方向性を作ることによって授業が進行していた。3. 話し手の意見に対して聞き手が反論する場合、事実として違うということがはっきり述べられていた。4. 教師が話し手の意見を一度受け止めても、聞き手が後から反論を述べる様子が見られ、聞き手は反論する理由や別の考えを示し、解決方法を積極的に提案していた。結論として授業において、聞き手は話し手に対して反応することで授業の方向性を作っていた。

日本質的心理学会第 17 回実行委員会

大会実行委員長

渡邊芳之(帯広畜産大学)

実行委員(順不同)

土元哲平(立命館大学)

伊藤哲司(茨城大学)

小松藍生(臨床心理士、公認心理師)

勝谷紀子(北陸学院大学)

能智正博(東京大学)

尾見康博(山梨大学)

安田裕子(立命館大学)

サトウタツヤ(立命館大学)

杉浦彰子(茨城大学)

事務局

荒川 歩(武蔵野美術大学)

広告

新曜社

北大路書房

風間書房

日本質的心理学会第 17 回大会プログラム抄録集

発行日：2020 年 10 月 6 日

発行者：日本質的心理学会第 17 回大会実行委員会

大会事務局：東京都小平市小川町 1-7-36 武蔵野美術大学 荒川歩研究室

事務業務委託：LSa

知的障害を伴わない発達障害児・者のきょうだいの体験に関する研究

大瀧 玲子著 10000円

ASDやADHDなど知的障害を伴わない発達障害児・者のきょうだいはどのような体験をしているのか？ 児童期から成人期に至るまでの体験を質的に検討し明らかにした。

道徳の時間における児童の資料理解

三輪 聡子著 6000円

読み物資料を用いた道徳授業における児童の道徳概念の理解過程を解明。アナロジー推論と動機の読み取りの観点からアプローチし、理解を促す実践の提案を行う。

図式的表現期における子どもの画面構成プロセスの研究

栗山 誠著 8000円

子どもは絵を描く過程で何を体験し、何が要因で描き続けるのか。視覚的文脈と物語的文脈に注目して分析し、子どもにとっての面白さ（リアリティ）を考察した。

他者との相互作用を通じた幼児の造形表現プロセスの検討

佐川早季子著 7500円

本書は、保育の場の製作コーナーでの造形表現に焦点をあて、他者やモノとの身体的・視覚的・言語的相互作用を通して幼児が造形表現を行うプロセスを描出している。

中学校英語科における教室談話研究

東條 弘子著 8000円

中学校英語授業ではどのような相互作用がなされているのか。5年間の授業観察と共同研究に基づき、一人の教師による教育実践を、社会文化理論に即して分析・検討する。

母子家庭へのソーシャルワーク実践モデル

久保田 純著 7500円

「当事者にとってよい支援」とは何か、を問い続けてきた著者が、ソーシャルワーク実践の事例を事例研究法で精緻化。有用な理論としての確立を目指した書。

青年期から成人期の対人的枠組みと人生の語りに関する縦断的研究

山岸 明子著 8500円

「人はどのように発達し何がそれを規定するのか」という発達心理学の中核の問題について17-19年の長期縦断研究を行い、質的・量的データによって多面的に検討した。

生活習慣形成における幼児の社会情動的発達過程

平野麻衣子著 9000円

保育の場で、幼児は片付けという生活習慣をどのように形成していくのか。人的・物的環境との相互作用から実証的に捉えたプロセスを、社会情動的発達過程として解明。

意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズム

小野田亮介著 8500円

意見文産出において、反論の想定やそれに対する再反論が欠如する現象（マイサイドバイアス）のメカニズムを実証的に解明し、その克服支援方法について提案する。

成人知的障がい者の「将来の生活場所の選択」に関する研究

山田 哲子著 7500円

知的障がい者家族の「親亡き後」や「将来の生活」をテーマに、当事者の声に基づいた新しい家族支援の在り方について探求し、実践研究によりその効果を検討した新著。

北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

ナラティブ・セラピーのダイアログ

ー他者と紡ぐ治療的会話、その〈言語〉を求めてー 国重浩一・横山克貴編著 A5・408頁・本体3600円＋税
日本人の熟練ナラティブ・セラピストによる4つのデモンストレーションの逐語録を、全編収録。各々の対話について、対人援助職の3名が、さまざまな視点で読み解いていく。硬直した支配的な言説に抗して、治療的会話の多様性と可能性を探る。

みんなのスピリチュアリティ

ーシシリー・ソンドース、トータルペインの現在ー A. グッドヘッド・N. ハートレー編 小森康永他訳 四六・376頁・本体3900円＋税
ホスピスはいかにして死にゆく人とその家族を支えるのか？ ホスピスで長年働いてきた医療者やボランティアがスピリチュアリティをどう理解してきたのか、自身の経験を交えながら率直に語り合う。

グラフィック・メディスン・マニフェスト

ーマンガで医療が変わるー MK. サーウィック他著 小森康永他訳 A4変形・228頁・本体4000円＋税
グラフィック・メディスンの中核は、健康と病のストーリーテリングであり、患者の複雑な経験を描き出すことにある。マンガを通して、一般患者という概念に抵抗し、矛盾する視点や経験でもって複数の患者を鮮やかに表現するムーヴメントへの誘い。

法臨床学への転回 第1巻 法の権力とナラティブ

和田仁孝著 A5上製・280頁・本体5000円＋税
著者の年来の解釈法社会学の手法をさらに深化させ学範を越境する。「臨床」という語の含意と価値を、理論的・批判的・実践的に更新し、「法臨床学」へと舵を切る。〈法〉の語りの抑圧性を批判的に検証しつつ「臨床」をとらえ直す。シリーズ全3巻の第1回配本。

手作りの悲嘆

ー死別について語るとき〈私たち〉が語ることー L. ヘツキ・J. ウィンズレイド著 小森康永・奥野 光・ヘミ和香訳 A5・336頁・本体3900円＋税
悲嘆の痛みをやり過ごす最も良い方法は、既製のモデルに従うのではなく、その人自身の反応を「手作りする」ことにある。社会構成主義の立場から、死の臨床における治療的会話の新たな枠組みを示す。

子どもに寄り添うライフストーリーワーク

ー社会的養護の現場からー 園部博範・秋月穂高編著 A5・204頁・本体2400円＋税
児童養護施設や里親のもとで暮してきた子どもが、未来に向けて自身の生き立ちを整理するライフストーリーワーク。日本の環境面との違いから、現場への導入・活用に困惑を生じている。実践ベースで成果を上げている事例を通じ、現場での様々な悩みに応える。

ナラティブ・メディスンの原理と実践

R. シャロン他著 斎藤清二・栗原幸江・齋藤章太郎訳 A5上製・544頁・本体6000円＋税
ナラティブ・メディスンは、全ての診療において必要とされる「語る」と「聴く」とから生まれる感情と問主観的関係の重要性を強調する。医療者のための全く新しい教育法の全貌が、今ここに明らかにされる。

声の法社会学

西田英一著 A5上製・256頁・本体5000円＋税
紛争、問題解決場面や乗り越えの過程で〈声〉はどんな働きをするのか。〈声〉が〈法〉と、身体が規範・文化・制度と、ぶつかり、きしむさまを描こうとしたエスノグラフィカルな考察。声の働き、即ち、本人性、手触り（メタメッセージ）、言葉・物語・意味とのあらがいが、その記述を試みた苦闘の跡でもある。

質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著／平山満義監訳 4600円～5600円＋税

人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル・V. L. プラノ／クラーク著／大谷順子訳 3300円＋税

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 2800円＋税

質的研究用語事典

T. A. シュワント著／伊藤 勇他監訳 3200円＋税

なるほど！ 心理学観察法

三浦麻子監修／佐藤 寛編著 2200円＋税

〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋・好井裕明編著 2800円＋税

質的データの取り扱い

L. リチャーズ著／大谷順子・大杉卓三訳 3200円＋税

心理学マニュアル 観察法

中澤 潤・大野木裕明・南 博文編著 1300円＋税

ナラティブ・アプローチの理論から実践まで

G. モンク他編／国重浩一・バーナード紫訳 2600円＋税

良質な質的研究のための、 かなり挑発的で とても実践的な本

新刊

—— 有益な問い、効果的なデータ収集と分析、
研究で重要なこと

D. シルヴァーマン 著／渡辺忠温 訳

A5 判並製 240 頁・本体 2,600 円＋税

なぜ調査の方法が重要なのか。質的研究の基底にある論理とはどのようなものか。将来的な方向の鍵となる議論は何か。多くのテキストが表面的にしか扱わざるをえなかった調査研究についての実践的な事例とデータ分析の実際の経験を惜しみなく提示。

根の場所をまもる

新刊

—— 沖縄・備瀬ムラの神人たちと伝統行事の継承

石井宏典 著

四六判並製 290 頁・本体 2,800 円＋税

沖縄・本部半島先端の備瀬。その厳しい自然条件が、神々の庇護を求めて祈る姿勢をはぐくんだ。今も神々とながら根の場所で拝み続ける神人（かみんちゅ）と呼ばれる女たちがいる。彼女たちの世界に近づき、伝統行事を継承することの意義を 10 年に及ぶフィールドワークから探る。

急性期病院のエスノグラフィー

—— 協働実践としての看護

新刊

前田泰樹・西村ユミ 著

A5 判並製 196 頁・本体 2,100 円＋税

急性期の現場で連携するため看護師たちは何を見聞き、考え、お互い報告しているのか。「チーム医療の大切さ」といった理念の主張に留まらず、個々の看護を協働によって円滑に成し遂げる方法論を見出し、病棟の時間と空間の編成を描きだす、質的研究のお手本ともなる記述を集めた記録集。

革命のヴィゴツキー

新刊

—— もうひとつの「発達最近接領域」理論

F. ニューマン・L. ホルツマン 著／

伊藤 崇・川俣智路 訳

四六判並製 452 頁・本体 3,600 円＋税

ロシアの心理学者ヴィゴツキーの理論が、21 世紀の社会問題に取り組む方法論として見直されている。日常的な営みのなかで「頭一つぶんの背伸び」をする。自分でありながらそうでない存在になる「パフォーマンス」が生み出す「革命」の理論・方法とその可能性。

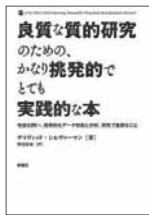
少年の「問題」／ 「問題」の少年

—— 逸脱する少年が幸せになるということ

松嶋秀明 著

四六判並製 228 頁・本体 2,300 円＋税

「やりたい放題」にみえる「問題」の少年たちは、「問題」をかかえた少年たちでもある。「荒れた」学校でのフィールドワークとインタビューを通して、少年と教師、教師同士の「関係性」をとらえ、何が彼らの幸せにつながるのかを探る。



ワードマップ 質的研究法 マッピング

／たちまち 4刷／

—— 特徴をつかみ、活用するために

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 編

四六判並製 292 頁・本体 2,800 円＋税

代表的な 26 の質的研究法を、それぞれの特徴を概観できるような四象限マトリクスを用いて整理（マッピング）し、第一線の研究者が解説。方法論の基礎や新しい動向もカバー。最良の方法を選んで活用するためのこれまでにない入門書。



質的心理学研究 第19号

特集 身体を対象にした、あるいは、
身体を介した／通した質的研究

日本質的心理学会 編

B5 判並製 268 頁・本体 3,200 円＋税



質的心理学辞典

電子書籍あり

能智正博 編集代表

香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・
柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 編

A5 判並製 432 頁・本体 4,800 円＋税



好評! SAGE 質的研究キット 全 8 巻

1 質的研究のデザイン

U. フリック 著／鈴木聡志 訳 A5 判並製 196 頁・本体 2,100 円＋税

2 質的研究のための「インター・ビュー」

S. クヴァール 著／能智正博・徳田治子 訳
A5 判並製 272 頁・本体 2,700 円＋税

3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察

M. アングロシーノ 著／柴山真琴 訳
A5 判並製 168 頁・本体 1,800 円＋税

4 質的研究のためのフォーカスグループ

R. バーバー 著／大橋靖史ほか 訳（※近刊）

5 質的研究におけるビジュアルデータの使用

M. バンクス 著／石黒広昭 監訳 A5 判並製 224 頁・本体 2,400 円＋税

6 質的データの分析

G. R. ギブズ 著／砂上史子・一柳智紀・一柳 梢 訳
A5 判並製 280 頁・本体 2,900 円＋税

7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析

T. ラブリー 著／大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 訳
A5 判並製 224 頁・本体 2,400 円＋税

8 質的研究の「質」管理

U. フリック 著／上淵寿 訳 A5 判並製 224 頁・本体 2,400 円＋税

2020年11月末日までのご注文は15%OFF!

日本質的心理学会 会員の方は、ご注文時に学会会員であることを明記してください。本体価格より15%割引いたします。
掲載以外の本もOK。公費でのご注文も承ります。

ご注文・お問い合わせ

sales@shin-yo-sha.co.jp または FAX 03-3239-2958



新 曜 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9
TEL 03-3264-4973（代表）/ FAX 03-3239-2958
https://www.shin-yo-sha.co.jp/

